「海外に子ども用車椅子を届けよう！」

ラオス　プロジェクト

活動報告書

The Volunteers Group
to Send Wheelchairs
to Overseas Children
JAPAN

2018 年度 4 月～2019 年 3 月

相模女子大学　海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトチーム
NPO 法人　海外に子ども用車椅子を送る会

目次

NPO 法人 海外に子ども用車椅子を送る会　会長　森田祐和氏のメッセージ…３

相模女子大学小泉京美教授より……４

海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクト活動メンバー……５

ラオスプロジェクト報告……６

ラオス活動日程……７～８

ラオス活動報告……９～２４

対談（家庭訪問）……２５～２６

対談（贈呈式）……２７～２９

個人報告書……３０～４０

ラオス写真集……４１～４３

日本での活動……４４

2018 年度活動記録……４５～４６

もんじぇ祭り報告書……４７～５１

相生祭報告書……５２～５４

日本チーム報告書……５５～７１

卒業生ページ……７２

小さな車いすに心を込めて

広い意味で人間は動物です。動物は読んで字のごとく動く物です。不動ではありません。自分の生活の中で、動く自由を許されないとしたら、精神的な負荷は想像を絶することです。私はかつて障がい児童の施設で「人間は 10 年間外に出られないと命を落としますよ」と語っていた園長先生の言葉が忘れられません。

開発途上国の肢体不自由な児童の現実は、上記の暮らしを強いられていることが問題です。国からの福祉の恩恵もなく、両親も収入面から助けることができない現実があり、毎日部屋の中で暮らす日々しかありません。外出する手段としての車いすが一台あれば、外気に触れて光を浴びることもできます。動く自由も獲得できます。

日本では成長とともに 3 年ほどで、30 万円もする車いすを乗り換えて廃棄されています。車いすの価格の 9 割は公費負担です。恵まれたことに日本の父兄は 1 割の価格で新車が手に入ります。

こうした背景に、途上国では誰も体が動かぬ子どもを助けることもできず、社会から置き去りにされているのが現実です。社会から切り離されて外に出られない子どもたちに、動く自由と喜びを、さらに社会参加できることを願って日本から海外に車いすを送り出しております。そこにわずかでも希望があるかぎり、推し進めていきたいと考えております。

ＮＰＯ法人　海外に子ども用車椅子を送る会
会　長　　森田　祐和

可愛い子には旅をさせよ

相模女子大学の車椅子活動は早いもので８年目を迎えました。今年は海外の贈呈式に参加するのが３回目になる学生もいたので、私は主導するのを控えて学生だけで独り立ちできるか、やらせてみようと思いました。「可愛い子には旅をさせよ」です。今年の私はプロジェクトに不可欠な資金調達の役割に徹しました。学生達は「今年の先生は全く何もしてくれない」と思ったかもしれません。親が動いてくれなければ、子供は自分の目的を達成のために動かざるを得ません。学生たちは今までの経験を踏まえつつ思考錯誤しながらも、期待以上に自主的に行動してくれました。

旅行日程のプランニング、航空券の手配、現地との連絡など NPO の方々と相談しながら、学生メンバー同士お互いに協力し合ってラオスに車椅子を海外発送し、現地での贈呈式までの計画を立案しました。また現地の日別の行動計画は、行きたい場所を学生自らが手探りで決め、贈呈先の家庭訪問では温かい交流が出来ました。しかしながら過去に贈呈した車椅子が使われずに放置されているというショッキングな光景を学生は体験しました。原因はタイヤの虫ゴムが劣化による空気が洩れですが、工業規格が異なるため日本から送ったタイヤの虫ゴムが現地で手に入らないからです。これも現地訪問しなければ判らなかった貴重な体験であり、メンテナンスの維持管理という今後の課題を発見することができました。現地の移動では飛行機の遅延により、予定していた観光地に行くことができないかもしれないという窮地に追い込まれましたが、現地旅行社と学生が連絡をとり、最終的には無事に現地訪問を遂行し、当初の目的を達成することかできました。「可愛い子には旅をさせよ」を信じて学生メンバーの主体性を尊重したのは私自身の成長にもなりました。

今回のプロジェクトを通して、学生たちは人とのつながりや継続的な支援の重要性を肌で感じているのではないかと思います。学生にとって今年の活動は自立の第一歩となりましたが、これを機会に学生だけで活動ができる組織作りを近い将来の目標とし、目指していきたいと思っています。学生達が本活動を通して成長することができるのは、定例会で指導をしてくださる森田会長や小田理事、NPO のメンバーの方々をはじめ、本プロジェクトを応援してくださる企業や相模大野ロータリークラブ、山本徳次郎様、ラテン大和様、大学関係者など多くの方々の支えによるものです。皆様に感謝をするとともに、書面をもって、関係各位の方々にお礼を申し上げます。

相模女子大学
学芸学部英語文化コミュニケーション学科
教授　小泉　京美

海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクト活動メンバー

名前	学科	学年	役職
下垣美優	英語文化コミュニケーション	4年	
小西麻結	英語文化コミュニケーション	4年	
横山奈瑠美	英語文化コミュニケーション	4年	
小此木玲奈	英語文化コミュニケーション	4年	
奥泉由花	英語文化コミュニケーション	4年	
江川こころ	英語文化コミュニケーション	4年	
金刺珠里	英語文化コミュニケーション	4年	
若山弥紀	英語文化コミュニケーション	4年	
野口由希	英語文化コミュニケーション	4年	
篠原瑞樹	英語文化コミュニケーション	3年	代表・海外プロジェクト副リーダー
島貫由香子	英語文化コミュニケーション	3年	副代表・もんじぇ祭りリーダー
吉原沙渚	英語文化コミュニケーション	3年	副代表・海外プロジェクトリーダー
杉山真理	英語文化コミュニケーション	3年	会計・相生祭リーダー
杉原未紗	英語文化コミュニケーション	3年	
河野日和	英語文化コミュニケーション	2年	定例会代表
石井水稀	英語文化コミュニケーション	2年	
近藤優果	社会マネジメント	2年	
北村実玖	英語文化コミュニケーション	2年	
髙村春那	英語文化コミュニケーション	2年	
鎌田舞	英語文化コミュニケーション	2年	
神戸悠	英語文化コミュニケーション	2年	
川上まどか	英語文化コミュニケーション	1年	
佐野莉桜	子ども教育	1年	
大村亜実	社会マネジメント	1年	
富永結	英語文化コミュニケーション	1年	
川田桃菜	英語文化コミュニケーション	1年	
土屋美月	英語文化コミュニケーション	1年	

ラオスプロジェクト報告

ラオス訪問メンバー		
氏名	学科	学年
篠原瑞樹	英語文化コミュニケーション学科	３年
島貫由香子	英語文化コミュニケーション学科	３年
杉原未紗	英語文化コミュニケーション学科	３年
杉山真理	英語文化コミュニケーション学科	３年
吉原沙渚	英語文化コミュニケーション学科	３年
近藤優果	社会マネジメント学科	２年
大村亜実	社会マネジメント学科	１年
川田桃菜	英語文化コミュニケーション学科	１年

ラオス活動日程

	時間	内容
2/19	6:15	羽田空港集合
	8:55	ANA　NH857
	13:10	ハノイ到着
	16:40	VN QV312
	17:50	ビエンチャン
	20:00	ディナー開始
	21:00	ディナー終了
2/20	8:20	ホテル出発
	8:40	両替出発
	9:15	AID Children Association 訪問
	9:30	家庭訪問
	13:15	ランチ開始
	14:35	ランチ終了
	19:30	ディナー開始
	20:35	ディナー終了
	20：45	アイスクリーム店到着
02/21	9：25	ホテル出発
	9：35	施設到着
	11：20	施設出発
	11：25	学校到着
	11：50	学校出発
	12：00	ランチ開始
	13：00	ランチ終了
	13：05	家庭訪問
	17：35	ホテル到着
	19：30	ディナー開始
	21：00	ディナー終了
2/22（金）	7:35	ホテル出発
	8:30	贈呈式開始
	11:30	贈呈式終了
	12:00	ランチ開始
	13:00	ランチ終了
	17:30	ホテル到着

	14:20	タートルワン
	14:35	パトゥーサイ
	19:30	ディナー開始
	20:00	ディナー終了
2/23(土)	10:00	ホテル出発
	10:10	ワッタイ国際空港到着
	12:30	ワッタイ国際空港出発（80 分遅れ）
	13:15	ルアンパバン空港到着
	13:35	ルアンパバン空港出発
	14:15	メコン川到着昼食開始
	15:15	昼食終了
	15:30	メコンクルーズスタート
	16:40	メコンクルーズ終了
	16:45	ホテル到着チェックイン
	17:05	プーシーの丘向かう
	18:00	プーシーの丘到着
	18:15	プーシーの丘終了ナイトマーケット開始
	19:20	集合
	19:30	夕飯
	21:00	夕飯終了自由解散
2/24	6:00	托鉢出発
	8:30	朝市到着
	9:15	朝市出発
	9:30	博物館到着
	10:30	博物館出発
	11:00	ワットマイ到着
	11:30	ワットマイ出発
	14:20	ルアンパバーン到着
	20:30	ビエンチャン LK265
	21:35	ビエンチャン着
2/25	0:35	バンコク　NH808
	8:25	成田空港到着

活動報告

日時：2/20（火）
場所：ビエンチャン
施設場所：AID Children with Disability Association（ACDA）
障害児協会本部（代表者：ソンペット・アッカボン氏）

NPO 法人「海外に子ども用車椅子を送る会」の今回のプロジェクトのカウンターパートである「障害児協会（AID Children with Disability Association＝ACDA）」の本部を訪問した。ここでは他 4 人のスタッフが勤務している。22 日の贈呈式用の車椅子が約 20 台保管されていたが、日ごろ車いすは別の場所で保管している。ACAD はオーストラリア政府の寄附によって建てられたもので、ラオスには他国から支援されているものが多い。

自宅訪問

ACDA の職員の案内で 2017 年のプロジェクトで車椅子を受け取った人達の自宅を訪問した。最初の地域ホンスパ村ではボウチャン地域長（村長）がそれぞれの支度に案内してくれた。村長は手書きのノートで車椅子の配布状況を管理している。

1 件目　32 歳（男性）

私たちが家を訪ねた際、家族が出てきて迎え入れてくれた。彼は、松葉づえを使い、サポートをもらいながら歩いていた。私たちが送った車いすは高さが合わないため、使用していないとのこと。彼が持つ車いすは少し空気が抜けていたものの、まだ利用可能な状態だったため一度 ACDA のもとに返却。彼に合う車いすを改めて渡す形をとることにした。

2 件目　56 歳（男性）

寝ていたにもかかわらず起きて出迎えてくれた。車いすは外に放置されている状態であった。車いすはサイズが合わなかったため、利用せず個人的に別の車椅子を使用している。車いすはほこりやカビが付着していた。ACDA に返却して整備後ほかの子どもに渡すことにした。

3 件目　12 歳（男子）

　家族みんなで迎え入れてくれた彼の家では、会の整備の責任者である西野さんの会社ドリームファクトリー製の車いすを使用していた。

3 歳までは歩くことが出来ていたが、年々歩くことが難しくなった。歩くことができていた頃までは、学校に通っていたが歩行が困難になったため、今は学校に通っていない。車いすを利用することで移動距離が増えたと喜んでいた。

4 件目　24 歳（女性）

　家には 2 台の車椅子があり、一台は当会から送られた車いすを使用していたが、タイヤに問題があると思っていたため、他の支援団体から送られたものを使用している。彼女の母親は、リクライニングができ、外への散歩が可能になるため出来ればこちら使いたいと話す。タイヤの問題は虫ゴムの破損であり、タイヤに空気を送る穴に劣化して溶けたゴムが入り込んでいた。虫ゴムを新しいものを 4 回分渡し、自転車屋さんで空気を入れて利用することにした。

5 件目　17 歳（女性）

2017 年の贈呈式で車いすを受け取る予定だったが受け取ることが出来なかった彼女。座ることができないため寝ることができる車いすが欲しいと話す。現在はリハビリを定期的に行うため施設に通っているそうで、普段の食事は寝た状態でとり、おかゆを食べているとの話。今回の贈呈式で車いすを受け取る予定。

日時：2/21（水）

施設訪問：Medical Rehabilitation Center

大きな会議室に招かれ、ドクターカンポー氏からのラオスにおける問題の説明を受けた。ラオスは事故などの外的要因ではなく、障害率が高く、脳性麻痺やポリオ、膝に障害がある人が多いことが分かった。

成人用の車椅子製造が主で、2012 年までは JICA が支援していたが契約が切れたことをきっかけにアメリカの機関が支援している。

足に障害を持つ人のために手で動かす自転車型車いすを月に 15 台を製造している。ここで勤務している方は 9 人でそのうち 5 人が障害を持つ。

Out patient consultation

この病院には一日平均 37 人の体に障害を持つ方たちが通院している。

各 30 分のリハビリを一人週に 3 回を 6 か月間おこない、トータルでケアは 1 時間半。病室で働く PT（理学療法士）は 17 人おり一対一のリハビリだった。リハビリ費用は 20000KIP（日本円で約 260 円）かかる。

Occupation Therapy for Adult Patient

生活に必要な訓練をする場所（一緒に歩く、手を回す、かごにボールを入れる）

Medical Rehabilitation Department

ここでは電気治療を行う場所。一日平均 8 人の患者が通う。ST（言語障害）は一人 30 分の治療時間をかけている。マイクロウェーブ、ジムなどを利用したリハビリの部屋があり、それぞれの状況に対応できるようになっていた。

SK（筋肉障害）の部屋では、生まれつき足を曲げることが出来ない赤ちゃんがリハビリを受けていた。マッサージをすることで少しずつ筋肉をほぐしていっている。

歩行練習場には、坂道やでこぼこ道、筋肉を鍛えるアスレチックがあった。

Orthotics Workshop

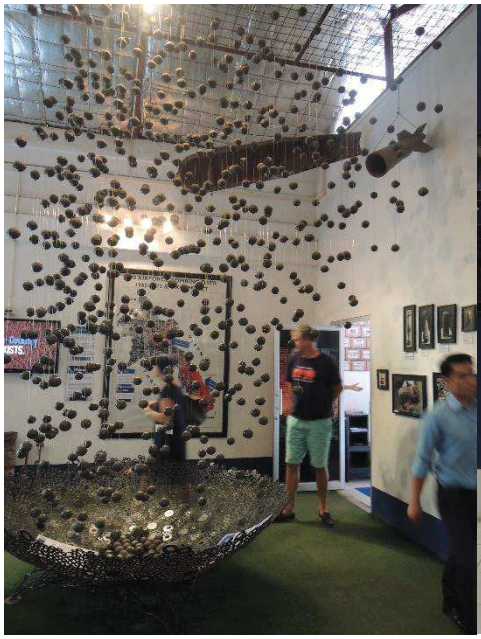
義足の作成を行う作業場で、作業されている方が真剣に取り組んでいる様子だった。
人それぞれのサイズで異なるが片足が約 2.5 kgでできている。

Visitor Center

ラオスに存在する一部の部族が手掛けるハンドメイド商品のポストカード、像のぬいぐるみ、ネックレス、Tシャツなどを販売し、その利益で施設が整っている。

地雷博物館

Visitor Center 内にある博物館で、当時の戦争の様子や地雷の悲劇について展示されていた。9 年間で 300 万トンの地雷と爆弾が落とされ、300 万人の命を失わせるほどの悲劇で、8 分間隔で爆弾が落とされる生活だった。
ここでは、義足（赤ちゃん用サイズから大人用まで）、当時使われていた生活用品当時の生活が伝わるものも展示され、当時の生活感が感じられる。



マーハーサイ小学校

午後、1 年生から 5 年生が通う小学校を訪問した。生徒数は 72 人でその内 38 人が障害を持つ子ども。学校のスケジュールは 8：00 から始まり 12：00 に昼食のため帰宅し、13：30 から再登校し 17：00 下校という流れ。

この学校には 6 歳から入ることができ、障害を持つ子は年代を問わず 16 歳や 20 歳の人も所属している。

私たちは振りが簡単で楽しめると思い「大きな栗の木の下で」を歌い、触れ合った。子どもたちは、私たちの振りを一生懸命真似して、踊ってくれた。

自宅訪問

2 月 20 日に続いて 2017 年に車椅子を受け取った人達の支度を訪問。
ターパランサイ村
1 件目　25 歳（女性）
家はバイクと自転車の修理が出来る家であるため、タイヤに問題を感じたが母親が修理し 2 年間使い続けている。
車椅子が小さいから大きさの合うものが欲しいとは思いつつも、今の車椅子を気に入っているため別の物に変えたくないと話す。サイズがあっていないが、頭部には丸めたタオルを付けたし、足には台を置いてサイズを合わせる工夫がされており、大切に使ってくださっている様子だった。4 回分の虫ゴムを渡し、今後の経過を見る。

ホンサバン村
2 件目　15 歳（女性）
彼女は親戚の人と暮らし、障害を持つ人も持たない人も一緒の生活を送っていた。家にいるときは車椅子を利用していないが、外出時には使用している。学校の扉の幅と車椅子の幅が合わず入らないことが問題であるため一回り小さい車椅子が欲しいと話す。
最後には彼女からオッケーサインして、嬉しそうに笑っていた。

サラカンパイ村

3 件目　14 歳（男性）

普段は室内利用をしている彼の車椅子は空気が抜けていたが問題ないと話していた。

タイヤがアメリカ式のため修理が出来ない状態であるが使い続けている。学校の登校時は自転車を利用していて、自転車に乗るときは、右手でペダルを漕ぐ。この車椅子をこれからも使い続けると言ってくれた。

ナーハイ村

4 件目　11 歳（女性）

お寺へ行くときに使用する程度で、それ以外では使われている様子がなかった。そのためタイヤはパンクした状態にあったが、アメリカ式のため虫ゴム交換が出来なかった。

彼女の父親はタイのゴムチューブを購入し修理を試みたが大きさが合わず直すことができなかった。そのため現在は他の支援団体から寄付された自転車型の車いすを利用している。

今後は車いすを一度 ACDA ガ引き取り、修理をしてから他の人に渡す予定となった。

ターパ村

5 件目　14 歳（男性）

彼の使う車椅子は彼のお父さん、お爺ちゃんと利用されているにもかかわらずとても保存状態が良かった。しかし、三代で使っているためブレーキをよく使うようで、ブレーキが劣化していた。空気入れを所持しているため、自宅すぐに空気を入れることが出来る。虫ゴムを 4 回分渡し、今後も利用してくれることだと願う。

6 件目　14 歳（女性）

半年前に車椅子から落ちたことをきっかけに恐怖心から乗れなくなった。その頃から放置され、長い間使われなくなったタイヤの空気は抜けている状態だった。パンクはしていない様子で利用可能だと判断し、虫ゴムの交換と方法の説明をし、交換用の虫ゴムを 2 回分渡した。彼女には小さいため、もう一回り大きいサイズの車椅子が欲しいと話す。

7 件目　27 歳（男性）

一か月前に空気が入らなくなったので使わなくなったという報告を受け、虫ゴム部分を確認してみると、虫ゴムの劣化で空気を入れる穴がふさがっていた。彼と一緒に暮らす兄に、虫ゴムの交換方法を伝え、その場で虫ゴムの交換を行った。4 回分の新しい虫ゴム部品と交換用ゴムを渡した。

贈呈式

日時：2/22（金）8：30-12：30
子どもの参加人数 10 組
1. あいさつ
2. プレゼンテーションと虫ゴムのデモンストレーション（永峰さん、相模女子大学）
3. 贈呈
4. 写真撮影

OPENING
司会の方から出席者の紹介があった。ホンスパ村の行政の方、障害を持つ子どもたちの家族、サイセタン郡の副郡長シルビア氏、海外の協会でラオスに支援をしているヘルイタッタ協会のカムラ氏。

1. あいさつ
出席者の紹介とともにソンペット・アッカボン氏からの挨拶。今回、通訳は村山明雄氏にお願いした。
「贈呈を喜びに感じ、社会の中で生活するために車椅子が使えると思っている。それを活用することによって家族の方の労働的負担が減り仕事ができるようになり、生活がより豊かになる。また、ラオスの南部でダムが決壊した地域に住む子どもたちにも支援をしたいと考えている。経済的に恵まれない家庭を対象にしていて、その車椅子を使うことで健常者の方とコミュニケーションを取れることを願う。」と話す。
ラオスでも車椅子は生産されているが子ども用の車椅子ではなく、日本のよりも品質が劣っており、かつ注文してから届くまでが 6 か月かかるためこの支援が役に立つと語る。
スリナブッタラー氏のスピーチ。
「経済と共に子どもたちのケアも発展させたい今後もこの活動を忘れず、この関係を続けたい」と話し私たちとの交流関係を続けたいと伝えてくれた。

2. プレゼンテーションとデモンストレーション

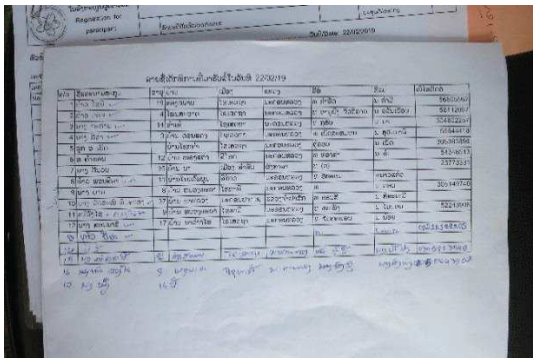
NPO 法人会員永峰さん、相模女子大学の順番でプレゼンテーションを行った。

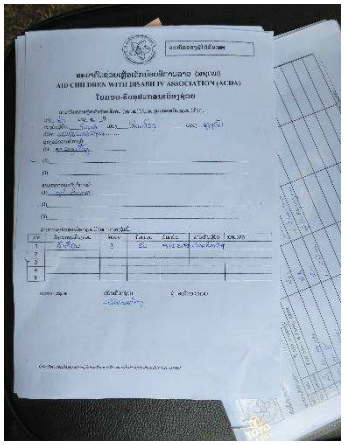
永峰さんからは、車椅子にはそれぞれのストーリーがあることと、車椅子を使うお子さんをもつ経験を踏まえた話と共に車いすを大切に使ってほしいという願いが込められていた。

相模女子大学からは、当会の活動についてと整備の重要性、日本での例会活動に参加するメンバーの方が笑顔で活動している様子を伝えた。また、そのプレゼンテーションで伝えたタイヤの整備（虫ゴム交換）について、実際にデモンストレーションをし、送った人それぞれに長く大切に使ってほしいという願いを込めた。

3. 贈呈

相模チームとして初めての野外で行われた。贈呈品として桜の花に書いたメッセージと文具と卵ボーロを渡したときに喜んでもらえたのが印象的であった。子どもたちに車椅子が正式に贈呈されるまでに障害者協会のスタッフと親御さんと確認し合い、サインをもらう工程を行っていた。一人一人に適した車椅子を決まるまでかなりの時間がかかっていた。





車椅子を受け取った人たちのサインとリスト。

4. 写真撮影

その日参加していた子どもとその家族、その他 ACDA や支援機関のスタッフ全員で集合写真を撮った。現地の写真の撮影合図「ヌン、ソン、サン（1、2、3）」の掛け声で輝いた笑顔を見せてくれた子どもたちから元気をもらった。

家庭訪問　対談

メンバー　篠原瑞樹・島貫由香子・近藤優果・大村亜実

島貫：今から私たちのチームは家庭訪問について話し合いたいと思います！

篠原：亜実ちゃんと優果ちゃんにとっては初めての家庭訪問だったけど、どうだった？

大村：使われてない車椅子があったのが驚きました。みんなに使ってもらっていると思っていたので、放置されている場合もあることを知りました。でも車椅子を使っている人も使ってない人も車椅子がないと不便と聞いて自分たちのやっている活動は意味があるんだなーと思いました。

近藤：実際に乗っていて車椅子が大好きだって言っている子いてうれしく思いました。使っている様子をよく見ることが出来てすごく良かったです。

島貫：私も最初のカンボジアの家庭訪問と比べると、使われていない車椅子があったことをラオス訪問で見ることが出来てショッキングだったけどその状況を実際に目で見て確認できたことは嬉しいとも思います。

近藤：私も放置されている車いすを見て悲しかったけど、もう一度修理してあげたいって思いました。

篠原：私は初めてカンボジアで家庭訪問させていただいたときは日本から送られた車椅子を、現地の人たちが笑顔で使用していて周りのご家族も笑顔でいる状況に満足していた部分もあったけど、今回の訪問ではみんなが言っているみたいに放置された車椅子を見られたし、新たな課題を見つけることもできたよね。このことを踏まえて、今後の活動に繋げていけると思った。

島貫：じゃあみんな想像していた状況と違うこともあって、ショックなことや衝撃だったことがありましたね。

篠原：でも綺麗に使ってくれている家庭もあったよね。

大村：３世代で使ってくれている家庭があって驚きました。

近藤：あとリクライニングを気に入っている子がいて、それも嬉しかったなー。

島貫：家庭訪問で出会った人たちは親近感があって、アットホームで笑顔が素敵でいい人が多いなーって思った。

篠原：言葉とかは通じなくても、私たちの訪問を歓迎してくれていたように感じたかな。

大村：グットポーズをしてくれたのが嬉しかったです！

島貫：言葉が伝わらない分、お互いが分かるジェスチャーがあると一気に縮まる気がしたよね！

近藤：そのポーズはラオスの人たちよく使っていましたよねー。小学校訪問の時とかも子供たちがグットポーズしていた気がする…。

島貫：じゃあ次にラオスに行ったときはグットポーズを最初から使っていけば距離が縮まるかもね！！

一同：（笑）

篠原：今回の訪問で実際に車椅子を使用しているお子さんを持つ家族の前で、虫ゴムの調査を行い、取り換えをしたのは新たな試みだったよね。

近藤：そうですねー。虫ゴム取ったらゴムが溶けていてめちゃくちゃビックリしました。暑いから気温が高すぎて溶けちゃうみたいで小田さんも記念に持って帰っていましたよね。

大村：あの色は見たことないですよね。

近藤：日本にいればすぐ修理できて、普段の例会だったら当たり前のように持ってきて取り替えていたのにラオスではそれは困難なことで、当たり前のことが当たり前じゃないことに気づけました。虫ゴムひとつで壊れたことになってもう使われなくなっているのがもどかしかったです。

篠原：新しい虫ゴムを渡すことで「これが欲しかったんだよ。」って言って喜んでくれていて、虫ゴム交換の説明をしている時もみんな熱心に聞いていたのが印象的だったなぁ。

近藤：贈呈式でも虫ゴムの説明を一斉に伝えることができたから、これを機にいろんな家庭に虫ゴムの知識が広まって欲しいと思いました！

大村：この家庭訪問を通してその車椅子の課題を知ることができて、その解決策の一つでもある虫ゴムのことを伝えられたのはとても良かったと思いました。

島貫：優果ちゃんと沙渚（吉原）は虫ゴム交換を披露していたから、２人はラオスの虫ゴム交換大使に任命だね！！

一同：（笑）

島貫：あと思ったのが村ごとに区切りがついていて村長さんが案内してくれることは日本であま　りないし、地域性があるなーって思った。今回はカンボジアの時より多くの家庭に訪問できて嬉しかったけど、もうちょっとお話もしたかったな。

篠原：確かに、そうだよね。もう少し一人一人と　話せる時間があったらもっと良かったかも！でもいろんな家庭を訪問できたからこそ、それぞれの家庭によって車椅子の使い方や扱い方が違ったりするのに気づけたことは良かったとおもいます。

大村：私も多くの家庭を見ることが出来て新たな発見があったんじゃないかなって思いました。それで生で現地の車椅子の現状を知れて家庭訪問をして良かったと思いました！

近藤：確かにどの道を通って、どんな家の中で使われているのかとか、ラオスの環境と兼ねて見ることができたのが一番の収穫でした。

篠原：今回学んだことを今後どう活かせるか考えていきたいね。

贈呈式　対談

メンバー：杉原未沙・杉山真理・吉原沙渚・川田桃菜

吉原：初めての参加はどうだった？

杉原：車椅子と文房具を渡した時にその子と家族が喜んでいたのが印象深かった。地元の人がすごいフレンドリーだった。

川田：実際に今まで日本で整備をしていた車椅子を現地で使っているのを生で見て率直にうれしかった。虫ゴムが溶けていることなどが原因で現地の人が壊れたと思っていたことが衝撃的だった。

吉原：私たちは何度か経験をしているけどどうだった？

杉山：カンボジアの時と比べて、規模や人数が違うことや、子どもたちとの距離が近くてより家族の方の気持ちを感じることができた。3 年間参加してみて吉原さんはどうだった？

吉原：みんなが言うように規模間が違い、ご家族の人たちと近い距離でかかわることができて、心温まる時間だった。続々とくる子供たちは、車椅子に乗ると笑顔絶やさずにわたしたちに「コプチャイ」って言ってもらえてラオス向けの車椅子を整備していてよかったな～って思いました。

杉原：杉山さんと吉原さんは、何度か贈呈式に参加しているけど今までと違っていたところはなにかありましたか？

吉原：ミャンマーの贈呈式は 2 回あって病院でした。だから病院の先生やそこの病院に通っている親御さんも多く参加していました。今回は、村の中で行われていたけどミャンマーには子どものリハビリを含めた病院が会場だった。そのため、個々の疑問などを直接聞くことが難しかったが、ラオスでは会話がしやすかったため 1 人 1 人の意見に耳を傾けやすかったです。

杉山：カンボジアの時は、ラオスの贈呈式の何倍も多い子どもたちやそのご家族の方が来てくれて賑やかな贈呈式でした。贈呈式でデモンストレーションを行うのは初めてでしたが、ご家族の方の真剣に聞く表情が印象的でした。プレゼンをした 2 人はどうだった？

川田：日本以外でプレゼンテーションをするのが初めてだったのでとても緊張しました。でも現地の方々が話をしっかり聞いてくれたので笑顔で話すことができました。虫ゴムの交換を話すところがあったのでその内容はゆっくり話すように気を付けて伝わるようにしました。伝えるために原稿を見ずにアイコンタクトをして伝えるよう心がけました。

吉原：私は 3 度目のプレゼンテーションをやらせてもらって、初めて日本語での発表でした。いつもの英語でのプレゼンに比べれば、少し余裕をもってできたかな～と思いました。今回はいつもより参加人数が少ないので一人一人に伝わるようゆっくり話し

てその時に家族の方から微笑んでもらい、反応をもらった時は自分たちの活動と車椅子に対する私たちの想いを届けられたのではないのかと感じています。

杉山：行く前はどんな贈呈式を想像していましたか？

川田：危ないというのを聞いていたので少し不安だったのですが、実際に会ってみると優しい方ばかりで、言語がわからなくても伝え合おうというところに感動しました。手作りのおいしいご飯も頂けて、仲が深まりました。話しかけてくれたのがうれしかったです。

杉原：私が想像していたのは子ども達と触れ合う時間が少なく車椅子を贈呈して終わりだと思っていた。けど実際に行ってみたら渡した時に喜んでもらったのとありがとう言われたのがうれしかった。贈呈式の後にご飯を一緒に食べられると思っていなかったから、びっくりしたし、おいしかった。地元の人とも別れるときに挨拶してくれるくらいフレンドリーだった。

杉山：私は室内で行う贈呈式を想像していました。なので、プレゼンも屋外で行うと聞いたときは驚きました。室内で行うより開放的でたくさんの人の声を聞くことができたりしたので、カンボジアの時や想像していたものとはまた違った良さを感じました。

吉原：今回は虫ゴムを実際に持っていってデモンストレーションするということで初の試みでした。例年を見ていると参加される人数も多いので私たちが説明をする内容は届かないのかなと思っていましたが、少人数の参加でもあったため話が通りやすかったです。

川田：今までの訪問で改善されたことや活かされたことはなんですか？

杉山・吉原：虫ゴムじゃないですか！

杉山：自宅訪問をした際に、2年前に送った車椅子を見て虫ゴムが溶けたことによってタイヤに空気が入らなくなり使えなくなってしまっている現状を知ることができました。だから、贈呈式でデモンストレーションを行うことによってご家族の方も虫ゴムの交換方法を知ることができ、これからは少しでも長く使ってもらえるようになるのではないのかなと思いました。

吉原：椅子をもらっても放置されて雑に扱われることも現状にあったと思いますが、整備担当でもあるので実際に虫ゴムを見せてこの小さな部品が車椅子の大きな心臓部分になることを知ってもらえたのではないかなと思います。また、実際に利用している永峰さんから助言をもらうことでより車椅子の重要性を感じることができました。

杉山：ラオスに行って経験してみて変わったことはありますか？

杉原：今回ラオスに行ってみて障害者の人数が多かったことを知って今ある生活を大事にしようと思った。あとは、道路のほうで整備されているところとされてないところの違いが大きかったのも経験して気づけなかったことだなって実感できた。

川田：今まで整備活動をしてきて子どもたちの顔があまり浮かんでこなかったけど、今は車椅子のことを考えるとラオスで出会った子どもたちの顔が浮かんできてより一層整備活動を頑張ろうと思いました。

吉原：一緒に頑張ろうね。

川田：はい。整備上達します。

杉山：来年度も車椅子リストたくさん作ります！

ラオス訪問と１年間を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　３年
代表・海外プロジェクト副リーダー　篠原　瑞樹

私はこの活動を通して海外訪問をさせていただくのは、２０１６年度のカンボジア訪問以来で２度目となりました。私自身２度目の参加ということもあってか、初参加の時よりも気持ちに余裕があり、程よい緊張感を持って訪問することができたと思います。過去に日本から送られた車椅子を受け取った方のいるご家庭を１０件以上訪問させていただきました。状態も良く綺麗に大切に使用してくださっているご家族がいらっしゃって、その姿を見て非常に嬉しく、ありがたく感じました。一方でサイズが合わなくなったり、虫ゴムの状態が悪くなったりして全く使用されなくなったご家庭もありました。しかし今回の訪問では日本から虫ゴムを持参して、交換方法をご家族に直接伝えることができました。これを機に車椅子を使用しているお子さんのご家族がご自身で虫ゴムの交換を行い、タイヤの劣化を防ぎ、少しでも長く車椅子に乗ってもらいたいと思いました。また、サイズが合わない状態で車椅子に乗っているお子さんには、新たに自分に合った車椅子が送られてより快適に車椅子に乗って生活してもらえたら良いなと思いました。多くのご家庭を訪問させていただく中で、最初は緊張していたり恥ずかしがっていても、次第に優しい笑顔を見せてくれたお子さんもいて、別れの際には「もう少しこの場にいたいな」と感じる瞬間も多くありました。

贈呈式は野外で行われ非常に開放感があるように感じられました。車椅子を使用するお子さんとそのご家族や職員の方や村の人々が大勢参加していて、にぎやかな雰囲気でどこかアットホームな感覚がありました。虫ゴム交換のデモンストレーションを行うと、その場にいた方々が真剣なまなざしでその様子を見ていたのが印象的でした。普段の例会活動で私は整備を担当していて、当たり前のようにきれいな虫ゴムを手にしてタイヤに取り付けています。しかしそれがラオスの人々にとっては当たり前ではなく、欲しくてもなかなか手に入らない貴重なものであることを知りました。そんな虫ゴムを今回ラオスで車椅子を使用する人々に渡すことができたのは良かったと思いました。しかし、同じように虫ゴムを求めている人は今回出会った人たちだけでなく、過去に車椅子を受け取った様々な国にもきっといらっしゃるのだろうと思いました。なかなか難しいとは思いますが、その方々にも虫ゴムが渡り、それによって使えなくなったと思われていた車椅子が、再び誰かの生活を少しでも豊かにすることができたらもっといいなと思いました。過去に参加させていただいたカンボジアでの贈呈式は室内で行われ、お子さんやご家族の他に大勢の職員の方が参加していて少しかっちりとしている空間のように感じました。雰囲気は違っていたとしても、どちらの国の贈呈式も共通していたことがあります。それはその場にいる人々みんなが、車椅子を使用する子供たちのことを想っていて、さらに日本からどのような過程でどのような想いで車椅子が送られているのか理解しようとしているということです。言語や文化の壁など関係のない温かみがどちらもあると感じました。

ラオスを訪問して、実際に自分の目で状況を見て、直接現地の人々と交流できたことはとても勉強になりました。ここで学んだ経験を無駄にせず、今後の会での活動だけでなく、自分の生活にもどのように活かせるか考えていきたいと思います。

今回のラオス訪問で小田様、永峰様、松井様とも１週間共に過ごさせていただけたことも、私にとって非常に貴重な時間でした。日頃の例会活動だけでは話すことのない会話から初めて知ることや学ぶことが多くありました。気さくにご自身の経験や知識を話してくださり、時には楽しい会話で場を盛り上げてくださったお三方のおかげで、更に充実した１週間になったと思います。ありがとうございました。

今年度の個人的な目標の一つとして、例会活動に毎月参加するという目標を立てていました。正直私が１年生の時は、自分の好きなタイミングで行けばいいという軽い気持ちで参加していたように思います。しかしそれが今になっては、少しでも多くこの活動に関わっていたいと思えるようになり、今年度は一度も休むことなく例会活動に参加させていただきました。無理をしてではなく自らの意思で力を注ぎたいと思える活動に出会えたことは、私にとって大きな影響となりました。今後も自分なりにこの活動を頑張っていきたいと思います。

私は今年度、代表という立場を務めさせていただきました。正直私は全体を引っ張っていく力や主体性は欠けていたと思います。代表を務めさせていただいた１年間の中で、何度も不安になったり自信を無くしたりしました。しかしそんな時支えてくれたのは、１年生の時から共に活動に励んできた同学年のメンバーでした。同学年のメンバーは互いにはない魅力をそれぞれ持っていて、私にとっては常に刺激になる存在で彼女たちから学ぶことも沢山ありました。そんな信頼できるメンバー達と互いに支えたり、支えられたりをして来たことが、この１年間頑張れた一つの要因でもあったと思います。とても感謝しています。決して完璧なリードであったとは言えませんが、同学年メンバー全員で自分たちなりにチーム全体をリードすることができたのではないかと思います。また、４年生の先輩方も昨年度の経験を生かしたアドバイスをくださり、様々なイベント等にも積極的に参加していただき、とても頼もしい存在でした。私たち３年生は来年度、後輩たちをサポートしていく立場になると思います。そんなとき私たちも今年度の経験を活かした言動や行動がとれるようにしたいと思いました。

１年間を振り返った感想文

英語文化コミュニケーション学科　３年
副代表・もんじぇ祭りリーダー　島貫　由香子

1年を振り返ると昨年度の思いや気持ちなども同時に脳裏に思い浮かびます。私の大学生活に“海外に子ども用車椅子を送るPJ”はとても大きな影響を与えてくれました。一年生の時の車椅子を整備するボランティア団体の一員という認識から2年目の活動資金の調達や使われなくなった車椅子を回収する工程の見学や、中核の作業の重要性、そして今年の1年間は運営学年としてボランティアという活動はもちろんのこと、支援してくださっている徳次郎さんとのコンタクトや資金調達などの手配など、多岐にわたり中核の部分にまで活動の幅を広げられたと思います。ここまで深くのめり込めたのも同じ学年のメンバーがいてくれたおかげです。とてもバランスの取れたお互いを鼓舞し合えるとても大切な仲間だと思います。このメンバーでなかったら私はもっと消極的で多くの経験はなかったと思います。とても感謝しています。本当にありがとう。

また、私にとって1番の思い入れがあるイベントはもんじぇ祭りです。プロの商売人と肩を並べ一般客に商品を売り、買っていただくことや、毎月行われるもんじぇ会議には様々な企業の営業の方のお話を聞く機会を得られる。役所勤めの公務員の方のお話が聞けるなど自分にとって社会に出る前に様々な知識を得られる場所だと感じました。また、前年度より売り上げを上げるための外装やメニューの改善を毎年行い目に見えて売り上げが上がっていくのはとてもやりがいに感じます。加えて、行う度に新しい発見や改善点が見つかり少しずつ変化し売上に繋がっていく楽しさを学びました。授業では学ぶことのできない非常に実践的な活動が出来たと思います。来年度で最後のもんじぇ祭りですが色々な刺激をくださったことに感謝しみんなに恩返しをしながら貢献したいと思います。

私は車椅子プロジェクトに参加し、三年の月日が経ち、今回が３度目の海外 PJ 参加となりました。初めての発展途上国に訪問は私の五感すべてに強烈なインパクトを受けました。そして、カンボジアの子供たちとミャンマーの子供たち、ラオスの子供たちはみんな瞳が澄んでいて将来の夢を即答できる点にはとても感心したことを覚えています。日本の学生に将来何になりたいの？と質問してもまだ決まってないと大半の子は答える現状に慣れきっていたことが、衝撃が増した要因です。日本にいる若い人たちは瞳が曇っていると感じます。そして毎年一週間というあっという間の海外訪問を終えた後、来年も子供たちに会いに行きたいとそう感じるようになりました。私は世界各国の風土や衣・食・住を体感してもっと自分の世界を広げたいと思い大学に進学しました。そして、この会で体験した海外訪問は行くたびに勇気を与えてくれました。日本にいても訪問で得た熱い思いや原動力を絶やすことなく精いっぱいこれからも頑張っていきます。

初めてのラオス訪問を終えて

英語文化コミュニケーション学科　３年
杉原　未紗

今回、私は初めて海外へ訪問することが出来た。定例会にも参加していく時に自分の中でラオスへ行く目的が変わっていった事を感じた。それは「私が清掃に関わっていた車いすを子供達が使う所を見ていたい。」という目的が出来たからだ。今回、海外に行くこと自体が初めてだったのでとてもワクワクしていた。海外で見る景色や食べ物、どれも新鮮だった。１週間以内で家庭訪問と施設訪問を行うことが出来た。最初の家庭訪問は大人が使っていたのでびっくりした。しかも、体が合わない、タイヤの空気が抜けていることから使われていなかったのでショックだった。だが、今でも使ってくれている子供もいてくれていたのが嬉しかった。車いすのサイズが小さくなっても使ってくれている子、おじいちゃんとお父さんの３世代で使ってくれている子が特に印象に残っている。

今回、体に合わない事とタイヤの空気が抜けやすくなっているという２つの理由で使われなくなっていたのだが日本の車いすと海外の車いすの製造の過程で比較した際、違いがあってそれぞれに原因があった。

１つ目の体に合わないという理由だが、永峰さんから教えていただいた話によると日本の場合、車いすを作るのにその子の処方箋と理学療法士（PT）の協力が必要不可欠で、半年も製造に時間がいると聞いた。これは、処方箋を元に、その子の病状とどこで使うのかを調べたうえで一人一人に合わせたものが作られるからだった。お金も日本は国が９割負担してくれるため、何度でも作ることができる。しかし海外は一人一人に合わせておらず、結果的に合う子と合わない子が出てきてしまうのだった。またお金も全額負担になるため、新しいものも買うことができなくなってしまう。

２つ目の空気が抜けやすくなってしまうのは虫ゴムが溶けてしまうからだった。虫ゴムはタイヤの空気が抜けるのを防ぐのに使うものだが、向こうの気温が高い事と道路の環境が悪いままのせいで虫ゴムの消費が早くなってしまっていた。さらに、向こうの地域では虫ゴムを買おうにも日本のようなピッタリのサイズが見つからないため、空気を入れても抜けやすい状態になってしまうのだった。

施設訪問でカンポーさんの話でラオスがポリオや脳性麻痺が原因で障がい者率が高い事を知った。外来の病院とリハビリステーションもあって、マッサージやリハビリを通して、日常生活を送れるように訓練されていた事、そこでは成人用車いすの製造も行っており、９人中５人が身体障害者であった。またラオスでは世界で一番爆弾が落とされていて、不発弾で遊んだことにより大けがを負ったり、亡くなったりする子がいた事。けがをした子が使う義足の展示も行っていてとても勉強になった。

贈呈式の際、車いすの贈呈だけでなく虫ゴムのデモンストレーションを行って、虫ゴム

を送っていたのは良かったことだと思う。私が見たときに、清掃に関わった車いすがあって、新しく使ってくれている子が見つかった。その親子は虫ゴムのデモンストレーションの時も熱心に聞いていたそうなので大切に使ってくれるだろうと思った。また、文房具をあげた際に家族もその子もとてもうれしそうに笑って「ありがとう」と言っていたのが、印象深かった。今後の定例会も頑張っていろんな車いすを清掃していきたいと思う。

１年間の活動を通して

英語文化コミュニケーション学科　３年
会計・相生祭リーダー　杉山　真理

今回のラオス訪問では、2 年前のカンボジアを訪問した時とは違ったことを学ぶことができました。1 年生の時は初めてのことばかりで、気持ちに余裕がなく周りのことがあまり見えていませんでした。今回は 2 回目ということもあり、周りの状況を見ることができ、積極的に質問ができるようになりました。施設訪問では、1 つの施設でたくさんの種類のリハビリを行っていることがわかりました。1 番印象に残っているのは、手でこぐ自転車です。足が不自由な方のために手で動かせる自転車を施設内で作っていましたが、月に 15 台しか作ることができないので、貰えるまでにとても時間がかかることがわかりました。また、そこの従業員の方も半数の方が障害を持っていると聞いて、カンボジアの義足を作っている方で視覚に障害がある方のことを思い出しました。目が見えていなくても細かい作業ができるということに当時驚いたのを今でも覚えています。自宅訪問では 2 年前に届けた車椅子があまり使われていないことに衝撃を受けたのですが、その原因は虫ゴムが溶けてしまい空気が入らなくなってしまって使わなくなってしまったということです。ですが、気に入っているため治れば使いたいという声を聞いて、今後車椅子を送るときに何か対策を考えなければいけないと思いました。そのためにも相模チームの中でも虫ゴム交換ができるメンバーを増やしていかなければいけないのかなと思いました。

贈呈式の時には、車椅子に嬉しそうに座っている子どもたちや、その家族の方たちの笑顔を見るとこの活動をして訪問できてよかったと思えました。今年は虫ゴム交換のデモンストレーションを行いましたが、みんな真剣に聞いてくださり虫ゴムの大切さが少しでも伝わり、もっと長く車椅子を使ってもらえるのではないのかなと感じました。

今回永峰さんも一緒に訪問したことによって、普段の定例会ではあまり聞けないようなお話を聞くことができとても勉強になりました。贈呈式内でのプレゼンテーションを聞いて、辛かったことや永峰さん自身の気持ちを聞いて涙が出そうになりました。自宅訪問の時にも家族の方たちにアドバイスをしているのを聞いて、もっとお話を聞いてみたいと思いました。

今回ラオス訪問をして、海外の施設だけでなく日本の施設や義足を作っているところにも訪問し、自分たちの目で比較してみたいと思いました。

年間の活動を通しては、会計と相生祭の担当をしてきました。相生祭では、昨年度の「揚げバナナ」ではなく「ブラジルのソーセージ」を販売するといった初めてのことばかりで戸惑うことも多かったのですが、無事成功させることができました。販売目標は 500 個でしたが、1000 個を超えるソーセージを販売できたのは、拙い私のサポートをしてくださったメンバーや、ラテン大和さんのサポートがあったおかげだと思っています。なので、来年度は

いろいろな場面でのサポートができるようになりたいと思っています。

一年間の活動とラオス訪問を終えて

英語文化コミュニケーション学科　３年
副代表・海外プロジェクトリーダー　吉原　沙渚

今年度は、代表学年として多くのことを学んだ一年となりました。今までは後輩として活動していましたが、後輩が増え、メンバーをまとめていくかたくさん悩み、苦楽があると実感しています。初めてのもんじぇ祭り準備期間には、全員の目指すベクトルが同方向を向いておらず、どう呼びかければいいか考えました。しかし、実際なかなか伝わらず、感情的になってしまい、空気を悪くしてしまったと反省をしました。改めて自分の行動を振り返り、チームワークを築く方法を調べて、仲間全員がこの活動すべてに楽しいと思ってもらえるよう気を付けました。無事、お祭り当日では今まで以上の売り上げを出し、達成感のある日となりました。自分の指示の仕方にひと工夫加えることで、チームワークが感じられるものになると思いました。この経験を活かして、相生祭の当日も売り上げを上げることが出来、忙しさにも楽しさと達成感の溢れる時間になったと感じました。また、このチームワークは、整備活動でも実感することが出来ました。清掃、整備、梱包の中で一人一人が黙々とやるのではなく、話をしながら時には困ったことがあればすぐに聞く態勢を作ることで円滑さが出来ると思いました。この整備の進み具合で、コンテナを送る時期が変わり、金銭面でも大きな影響が出てしまうことを３年目の活動ではありますが、知ることが出来ました。グループでいるのではなく、チームとしてお互いのことを意識しながら作業を進めることが大切だと思いました。上の立場に立ってからこそ、分かるチームとしての重要な行動を理解できたと思います。

そして、2月に行ったラオス訪問はプロジェクトリーダーを務めさせていただきました。前期のチームが上手くための意識を常に意識し、訪問者が楽しいと思ってもらい、かつ初めて訪問する人には訪問してよかったと思ってもらえることが目標で、一人一人の意見を聞き全員が納得いくよう努めました。今回の訪問までの企画は学生主体を前年より重視されたもので、自分の定めた目標に達するため、常に緊張と責任感に追いかけられているようでした。訪問期間は、ハプニングが多くハラハラドキドキの毎日でしたが、自分たちで調べ、決めたことがあり、普段はなかなか話すことが出来ない仲間たちと寝ずに話したことで学年間を越えて絆が深められた時となりました。

今回の訪問は、自宅訪問の次に贈呈式というスケジュールでした。自宅訪問に行く前にACDAというこの活動でお世話になっている施設にお邪魔し、見学させていただきました。そこには、私たちが整備した車いすが多くあり、この車いすで子どもたちや親御さんが笑顔になってくれるのかなと思い、嬉しくなりました。例年より多い自宅訪問でしたが、「この車いすが好き！」と言っている子どもや「この車いすのおかげで生活が楽しくなった」と話してくださる方を見て、改めてこの活動をしている意味を実感しました。また、

今回は車いすのタイヤに空気が入らないと言い利用していない方も見られました。タイヤの空気注入口を分解すると虫ゴムが現地の暑さで劣化し、注入口をふさいでいました。話は聞いたことがあるけど、実際日本では起こらないことなので初めての事実に驚き、ただ車いすを送ることが受け渡された家庭の幸せにつながるものではないと感じました。私たちは。今回虫ゴムの部品を持ってきていたため交換用部品を渡し、点検方法を説明するとまた負担が少なくなると喜んでいた様子を見て、次からの訪問は整備器具を持っていけるものは持っていきたいと思いました。この部品は贈呈式でも、プレゼンテーションでこの部品がいかに大切かを説明し、実際にモノを使いデモンストレーションで伝えられたことが良かったです。今回の贈呈式は、今までより少人数であったため一人一人の疑問に耳を傾けて説明することが出来ました。

今回の訪問は、新しいことばかりで戸惑いと不安はたえませんでしたが、無事に終わりいい一年の締めくくりになる訪問になったと思います。無事に訪問できたのは、様々なコンタクトでサポートに入ってくださった小田理事や小泉先生、一緒に同行してくださった会員の松井さんと永峰さんに加え、現地でガイドと通訳をしてくださったカンさんとハッピースマイルの中村さんのおかげだと思います。そして、一緒に参加した学生メンバーも様々なところで支えてくださり、感謝でいっぱいです。

ラオスプロジェクト感想文

社会マネジメント学科　２年
近藤　優果

今回のラオスプロジェクトでは自宅訪問を初めて体験し、送った車椅子がどんな人に、どのような環境で使われているのかを実際に見て今の社会の現状を考える良いきっかけとなりました。

利用している方は子どもだけでなく幅広い世代で利用されていました。私たちが会いに行くと、たくさん笑顔を見せてくれる方、緊張している方など表情を実際に見ることが出来ました。その中でも一番心に引っ掛かった方がいます。はじめは笑顔を見せてくれていましたが、私たちが虫ゴムの交換、説明をしたあとお別れをするときにずっと下を向いて笑顔が消えてしまっていました。何がきっかけでどうして笑顔が消えてしまったのか分かりませんでした。そしてどう対応したらいいのか分からずそのまま帰るだけになってしまい、心残りでした。また、車椅子から落ちた経験がありそれ以来使用していない方もいました。車椅子をただ送っただけでは、壊れてしまったらもう使えないし、どんな気持ちでいるのかを知ることが出来ません。このような現状であることを知ることができ、ただ送るだけではなく、気持ちよく利用してほしいし、次へ次へと使えるようにしていかなければいけないということを実際に目で見て気付くことが出来ました。

環境面については、村はガタガタした道で大きめの石やガラスの破片が落ちていたり、近くに大きなお店もありません。気温も高いので車椅子が壊れやすくなってしまっているのではないかと思いました。そして贈呈式を外で行い、全体的に自然と一体化しているのが印象的でした。昨年のミャンマーとの違いは、ヤンゴンは交通量が多いからか道路もしっかりしていて、車椅子の劣化を感じることはありませんでした。しかしラオスは住んでいる民族も違うので同じ国であるが場所により環境の差がとても大きいということがわかり、平等の難しさを痛感しました。

私自身が今回の訪問で学んだことは、臨機応変に動くことです。ラオスは時間がとてもゆっくり進んでいるかのようでした。筋道を立てて計画通りに進めることが一番大切ですが、うまく進まない場合は「なぜこうなったんだろう」と考えるよりも、「どうしたらいいのか」とすぐに次を考えなければいけないと思いました。私はまず計画を立てることが苦手なので、そこから頑張ります。

ラオスはお金がない国とガイドさんは言っていました。戦争に負け、何もかも他の国に持ってかれ、大量の爆弾や地雷が今でも残っています。けれど今はルアンパバンが世界遺産であり、他にも観光地が増えています。昔を知ることで、今があるということ。そして少しずつ変化しているということを知り、今回の訪問を機に発展途上国の魅力に惹きこまれました。次にラオスに行くときはどうなっているのか、とても楽しみです。

ラオス訪問

社会マネジメント学科　１年
大村　亜実

私は約１週間、ラオスを訪問し、ラオスの車椅子の現状を知ることができました。私たちが整備し海外へ送られている車椅子は子供たちに送られ、使ってもらっているのだろうと思っていました。しかし車椅子を使用している家庭に訪問してみると、大人の方々も使われていたり、タイヤがパンクしたり、体に合わないという理由で車椅子がほこりをかぶって放置されているのを見て私は驚いたのと同時に少し悲しい気持ちになりました。
それから使われなくなってしまった車椅子の原因に虫ゴムが関係していました。虫ゴムを取り替えればまた使うことができるがラオスの方々はそれを知りません。家庭訪問で伝えられてよかったと思いました。
そして実際に送られるはずの人に車椅子が送られていないなどそのようなことから自分の体に合った車椅子が送られていないということも分かりました。
これらのことを知れて解決策を伝えられたと思うので実行していってもらいたいと思います。

私が家庭訪問で印象深かったのは、どの家庭の方も車椅子がないと不便だと言っていたことでした。その言葉を聞いて、私たちが行っている活動を必要としてくれている方々がこんなにもいるのだということを感じました。

そして贈呈式では、多くの子供たちに会うことができました。初めて贈呈式に参加して、私たちが整備した車椅子が子供たちに送られるのを直接に見ることができ、実際に子供たちの笑顔を見たときはとても嬉しかったし、もっと私も頑張って整備したいと思いました。
贈呈式に参加された方々は、虫ゴムの説明を真剣に聞いてくださっていたので、虫ゴムを直し、壊れたり、放置されたままの車椅子が少なくなっていって欲しいです。
毎月１回の定例会で、私は何気なく整備し梱包していただけですが、子供たちの喜んでいる顔をみたらこれからは送る方への気持ちを考えて作業していかなければいけないことだと感じました。

私は今回ラオス訪問に参加することができて本当によかったと感じました。ラオスの車椅子の現状や贈呈式での子供たちの笑顔は自分の目で見てみないと分からなかったし、感じることはできなかったと思います。なかなか体験することができないので私にとってとても貴重な経験になりました。ラオス訪問を通して、ラオスの文化にも触れることができ、人々の温かさを感じ、ラオスが好きになったし、また行きたいと感じました。

ラオス訪問で感じたこと、見たことを忘れずにこれからの活動をしていき子供たちが笑顔になってもらえるように頑張っていきたいと思います。

ラオスプロジェクトを通して

英語文化コミュニケーション学科　1年
川田　桃菜

ラオスへ2月19日から25日の1週間に渡って施設訪問や贈呈式を行うプロジェクトに参加してきました。私にとってこのプロジェクトに参加すること、そして海外に行くことは初めての経験でした。たくさんの方々が支えてくださったおかげで貴重な1週間を過ごすことができました。

日本は寒い冬に対して、ラオスは35度前後の真夏日が続いていました。ラオスで自宅・施設訪問にまわるのはとても暑く苦労しましたが、現地に行かなければ気づかなかったことがたくさんありました。特に虫ゴムの重要性を理解できていない人がほとんどだということに驚きました。虫ゴムはタイヤの空気が外に出ないようにする大事なアイテムです。虫ゴムのゴムが溶けていたり、ないことにより空気が入らず、入っても空気がタイヤから抜けたりしてしまいます。現地の人々に虫ゴムの知識や重要性を充分に伝えられていないため、このことにより虫ゴムに原因があってタイヤに問題がなくても「この車椅子は壊れてしまったんだ」と誤解してしまい、修理すれば使える車椅子も使われなくなっていました。実際に訪問し現地の使っている車椅子を見てみると、虫ゴムが機能せず放置されている車椅子が多くありました。贈呈式では実際に車椅子を前に虫ゴムの説明したことで、家族の方にきちんと理解してもらうことができました。今後、私たちが現地にいなくても家族で直し、いつまでも大事に使ってくれることを願っています。

贈呈式で私は先輩方とプレゼンテーションを行いました。私たちの普段している整備活動についてや虫ゴムの説明、毎年寄付している車椅子の数などの内容を通訳の方に訳してもらいながら約15分間のプレゼンテーションを終えました。日本人以外の人を前にプレゼンテーションするのは初めてのため、とても緊張してしまい話すスピードが少し早くなってしまいましたが、笑顔で伝えたい思いを伝えることができました。また、贈呈式では車椅子を使っている家族と交流しました。言語はわからなくても、お互いの伝えたいことを必死に分かり合おうとする努力、気持ちに胸を打たれました。お昼には美味しい手作りのご飯も頂き、より一層仲を深めることができました。

今回のラオスプロジェクトを通して、私たちが整備している車椅子が、別の国の子供たちに届き、それを使っている様子を初めて目にすることができました。実際に使っている子供たちを見ると今まで丁寧に整備してきてよかったと心から嬉しかったです。いつも子供たちのために整備活動しているとわかっていても、日本に帰ってきてからは車椅子のことを考えるとラオスで出会った子供たちの笑顔が浮かんできます。虫ゴムの問題で使用できなくなっていた方々もいましたが、車椅子をもらって生活が楽になったといってくださった人も沢山いました。車椅子を必要としている人々に一人でも多くの人に届くよう、こ

れからも整備活動に力を注いでいきます。今　　回の
ラオスに参加して本当によかったです。

家庭訪問

施設訪問

贈呈式

観光・おまけ

日本での活動

日光かき氷かき方研修

バンニング

町田の丘学園　訪問

プレもんじぇ

相生祭

もんじぇ祭り

かき氷シロップ作り

２０１８年度活動記録

作成者：篠原瑞樹

年	月日	曜日	活動内容
2018 年	4 月 22 日	日	NPO 例会参加（悪天候により一週間延期）
2018 年	5 月 7 日	月	新集成向け説明会
2018 年	5 月 9 日	水	新集成向け説明会
2018 年	5 月 20 日	日	NPO 例会参加
2018 年	5 月 29 日	火	日興アセットマネジメントへ年間活動報告に伺う
2018 年	5 月 29 日	火	ソーセージの焼き方研修
2018 年	6 月 5 日	火	梅の収穫
2018 年	6 月 8 日	金	日光天然氷かき方研修
2018 年	6 月 9 日	土	講演会懇談会
2018 年	6 月 17 日	日	NPO 例会参加
2018 年	6 月 22 日	金	勉強会（ミャンマー活動報告・かき氷研修報告）
2018 年	6 月 27 日	水	チームビルディング講座
2018 年	7 月 3 日	火	新入生歓迎会
2018 年	7 月 10 日	火	勉強会（車椅子について）
2018 年	7 月 15 日	日	NPO 例会参加
2018 年	7 月 19 日	木	鎌倉特別支援学校訪問
2018 年	7 月 19 日	木	プレもんじぇ試作会
2018 年	7 月 29 日	日	プレもんじぇ
2018 年	8 月 6 日	月	町田の丘学園訪問
2018 年	8 月 19 日	日	NPO 例会参加
2018 年	8 月 23 日	木	もんじぇ祭り準備・シロップ作り
2018 年	8 月 25 日	土	もんじぇ祭り
2018 年	8 月 26 日	日	もんじぇ祭り
2018 年	8 月 27 日	月	もんじぇ祭り後片付け
2018 年	9 月 16 日	日	NPO 例会参加
2018 年	9 月 18 日	火	町田の丘学園訪問
2018 年	10 月 20 日	木	NPO 例会参加
2018 年	11 月 3 日	土	相生祭
2018 年	11 月 4 日	日	相生祭
2018 年	11 月 13 日	火	日光マウンテンランニング
2018 年	11 月 18 日	日	NPO 例会参加
2018 年	11 月 20 日	火	バンニング参加

2018 年	12 月 15 日	日	NPO 例会参加
2019 年	1 月 15 日	火	日光天然氷切り出し参加
2019 年	1 月 19 日	日	NPO 例会参加
2019 年	1 月 31 日	木	日光天然氷切り出し参加
2019 年	2 月 16 日	日	NPO 例会参加
2019 年	2 月 19 日	火	ラオスへ出発
2019 年	2 月 20 日	水	家庭訪問
2019 年	2 月 21 日	木	施設訪問・学校訪問・家庭訪問
2019 年	2 月 22 日	金	贈呈式・観光（ビエンチャン）
2019 年	2 月 23 日	土	観光（ルアンパバーン）
2019 年	2 月 24 日	日	観光（ルアンパバーン・ビエンチャン）
2019 年	2 月 25 日	月	帰国
2019 年	3 月 1 日	金	プロジェクト報告会
2019 年	3 月 17 日	日	NPO 例会参加

もんじぇ祭り報告書 2018

はじめに

もんじぇ祭りとは 2005 年から開催されている
相模大野で愛され続けているお祭りである。
私たちはもんじぇ祭りに参加させていただき４年目を迎えました。
地域の皆様からも毎年、日光の天然かき氷を待ち望んでいるお声を頂き
来年もより精進していきたく思います。

２０１８年度のもんじゃ祭り

開催日時：8 月 25 日・26 日　１４時～２１時
天候：両日ともに晴れ・気温 36℃
会場場所：相模大野中央公園
来場者数：１０万人（8 月 25 日：5 万人、8 月 26 日：5 万人）
出演者：１４組
出店数：３３店舗

参加者名簿

名前	学科	学年
小此木　玲奈	英語文化コミュニケーション学科	4年
横山　奈瑠実	英語文化コミュニケーション学科	4年
小西　麻結	英語文化コミュニケーション学科	4年
奥泉　由花	英語文化コミュニケーション学科	4年
江川　こころ	英語文化コミュニケーション学科	4年
野口　由希	英語文化コミュニケーション学科	4年
下垣　美優	英語文化コミュニケーション学科	4年
吉原　沙渚	英語文化コミュニケーション学科	3年
杉山　真理	英語文化コミュニケーション学科	3年
島貫　由香子	英語文化コミュニケーション学科	3年
杉原　未紗	英語文化コミュニケーション学科	3年
篠原　瑞樹	英語文化コミュニケーション学科	3年
石井　水稀	英語文化コミュニケーション学科	2年
河野　日和	英語文化コミュニケーション学科	2年
山田　澪	日本語日本文学科	2年
近藤　優果	社会マネジメント学科	2年
遠藤　麻実	人間心理学科	1年
乾　愛	人間心理学科	1年
永井　萌花	人間心理学科	1年
黒井　珠緒	人間心理学科	1年
川上　まどか	英語文化コミュニケーション学科	1年
斎藤　美優	英語文化コミュニケーション学科	1年
川田　桃菜	英語文化コミュニケーション学科	1年

会計報告

目標売上金額	400, 000 円
売上	876125 円
支出	3699721 円
利益	506153 円

商品名	販売個数
かき氷（500 円）	737 杯
ビール（500 円）	243，５杯
ビックホットドック（950 円）	46 個
トルティーヤ（500 円）	57 個
コロコロソーセージ（350 円）	31，５個
ブラジルソーセージ（350 円）	337 個
ガラナ（200 円）	53 缶
フランクフルト（150 円）	54 個
ラムネ（150 円）	100 本

かき氷のシロップ別の詳細

シロップ名	販売個数
いちご	３４６杯
うめ	１６３杯
ブルーベリー	１２５杯
黒蜜きな粉	１０３杯

売上個数比較

商品名	2016 年	2017 年	2018 年
かき氷(500 円)	３７９杯	５８１杯	７３７杯
ビール(500 円)	９１杯	２１５杯	２４３，５杯

もんじぇ祭りの様子
今年のもんじぇ祭りは猛暑の中行われ、日中の来場者は例年より少なく感じましたが夕方から会場は溢れんばかりの人で賑わい繁盛しました。
今後の課題として混雑時の整列や素早い商品の提供が課題です。

相生祭報告書 2018

海外に子ども用車椅子を贈ろう
プロジェクト
FROM JAPAN WITH LO
受け取り
ソーセージ
三百円
お会計は
こちら
ソーセージ

はじめに

2018 年度相生祭は 11/3(土)、11/4(日)の 2 日間に渡って行われました。1 日目の天候は晴れ(最高気温 19℃、最低気温 9℃)、2 日目の天候は曇り時々雨(最高気温 16℃、最低気温 11℃)でした。来場者数は 2 日間でのべ約 20,400 人でした。海外に子供用車椅子を届けよう！プロジェクトでは、ブラジルソーセージを販売しました。

1 日目

1 日目は前述の通り晴れ、ゲストのトークショー開催の影響か来場者は数多く、当初の予定だと 2 日間で 500 本を売り上げることを目標としていましたが 1 日目のみで 555 本を売り上げました。テント内で何本用意出来ているのか、調理室で茹であげるペースなどはじめは全体的に不明点が多く、列が長くなりすぎてしまったりお客様の待ち時間をながくしてしまったりしましたが、徐々に慣れて目標を大幅に超えることが出来ました。呼び込みではどのような言い方をすれば良いか、どの言葉を強調するかを考えながら行うことで客足が増えていきました。調理室での作業はソーセージの解凍･切り離し･串刺し･茹で(10 分)でした。解凍しきっていないソーセージに串を刺すのは少々危険な作業で、危うく手を刺しそうになる等ありましたが徐々に慣れてペースをあげていくことが出来ました。また、鍋が最初家庭用の小さなもの 1 つしかなく、しっかり火を通さなくてはいけないため急ぐことも出来ず、なかなかテントでの販売の回転率を良くすることが出来ませんでしたが、昼すぎにもう 1 つ急遽追加し、改善することが出来ました。テント内での販売では当初チケットでの交換制としていましたが、長い待ち時間の中でいなくなってしまうお客様がいらっしゃいました。1 日目は片付け作業もスムーズに終わり、反省会の結果、①大きな鍋を追加する②チケット制の廃止③2 日目の売上目標を 650 個に設定の 3 つを取り決め、全体は 17 時半に解散しました。

2 日目

2 日目は前述の通り曇り時々雨、朝から雨が降り、前日に比べ客足が遠のきなかなかソーセージが減らない時間が続きました。ラテン大和さんからお借りした大きな鍋の追加によりソーセージを大量に効率よく茹でることが出来るようになったため大幅に時間短縮出来ました。そのためテントで焼くためのソーセージが一時は 200 個を超えましたが、午後からは客足も徐々に増え、午後 2 時には目標個数を売り上げ、完売することが出来ました。1 日目に上手くできなかったことを全員が意識して工夫したり臨機応変に対応することができ、とてもスムーズに販売を行うことが出来ました。2 日間連続で来て下さるお客様や、リピートして下さるお客様もいらっしゃいました。大きなトラブルもなく、2 日間で昨年の約 2 倍の売り上げを記録することが出来ました。片付けも協力してスムーズに終えることができました。

参加者名簿

小此木　玲奈	英語文化コミュニケーション学科	４年
金刺　珠里	英語文化コミュニケーション学科	４年
小西　麻結	英語文化コミュニケーション学科	４年
下垣　美優	英語文化コミュニケーション学科	４年
横山　奈瑠美	英語文化コミュニケーション学科	４年
若山　弥紀	英語文化コミュニケーション学科	４年
篠原　瑞樹	英語文化コミュニケーション学科	３年
杉山　真理	英語文化コミュニケーション学科	３年
吉原　沙渚	英語文化コミュニケーション学科	３年
石井　水稀	英語文化コミュニケーション学科	２年
鎌田　舞	英語文化コミュニケーション学科	２年
河野　日和	英語文化コミュニケーション学科	２年
近藤　優果	社会マネジメント学科	２年
高村　春那	英語文化コミュニケーション学科	２年
大村　亜実	社会マネジメント学科	１年
川上　まどか	英語文化コミュニケーション学科	１年
富永　結	英語文化コミュニケーション学科	１年

会計報告

目標売上金額	150, 000 円
売上	349, 800 円
利益	242, 359 円
支出	107, 441 円

商品名	販売個数
ブラジルソーセージ(300 円)	1, 166 個（1 日目 555 個、2 日目 611 個）

筆跡鑑定

59, 100 円

１年間を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　４年
下垣　美優

今年は私たち４年生が相模女子大学の学生として活動できる最後の一年でした。今年は４年目にしてもまた、様々な新しい経験をさせていただきましたが、その中でも鎌倉養護学校へ足を運び直接お話を聞くことが出来たのは、この活動をする中で大きな意味に繋がったのではないかと思います。これまでにカンボジアやミャンマーの施設に訪問しましたが、恥ずかしいことに車椅子を提供してくださっている日本の施設をじっくり見た経験がありませんでした。鎌倉養護学校では、PTA 幹部の方と学校職員の方に、私たちの活動についてお話しました。忙しい中お時間を設けていただいて、職員の方の思いを質問形式で聞かせていただき、そして施設の方々に私たちの感謝の気持ちを伝えることができました。とても有意義で貴重なお時間を設けていただいたことに感謝しています。今年のチームでの役割としては、昨年は引っ張っていく立場として何かと先頭に立って物事を進めることが多かったですが、今年は後輩たちをサポートする立場としての参加でした。少し客観的な見方にはなりますが、３年生は今年度から始まった新しいことも多い中、少ない人数で連携をとり、主体的に動いて頑張っていたのがすごく印象的でした。今年は個人的な事情によりラオス訪問ができないことが残念ですが、訪問メンバーの報告を心待ちにしています。

私は１年生の頃から活動に参加していますが、始めた当初は、“ボランティア”だと思って軽い気持ちで活動していたのに比べ、今では NPO という立場で“プロジェクト”に参加している責任を持って活動しています。４年間の短い間ではありましたが、活動の仕組みや繋がりの大切さなど様々なことを勉強させていただきました。そしてこれから社会に出る私の務めは、今までしてきた貴重な経験をこれから出会う人々に共有することだと思っています。大学生活での学びを大切に、社会人として新たに頑張っていけたらと思います。ありがとうございました。

活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　４年
小西　麻結

私は大学１年生からこの活動に参加してきましたが、振り返ってみると私の大学生活はこの活動なしでは考えられない、そのくらい自分の中心にあるかけがえのないものでした。１年生のころはただ何かに打ち込みたく、友人の紹介で入り、気付いたら４年間が経っていました。正直な所、当初はボランティア活動をここまで長く続けることができないと思っていましたが、誰かのために相模女子大学の仲間、そして同じ意志を持つ方々と一緒に活動するのはこんなにも楽しいのかと私はどんどんのめりこんでいきました。２年生で先輩方や小田さんに付いていくようにカンボジアに訪問しましたが、そこで一層この活動の核心に触れハッとしました。清掃から始まり整備、梱包しコンテナに積む。訪問するまでは機械的にその作業を繰り返していましたが、それからは毎月の定例会で必要としている子どもたちの顔を想像しながらより一層良い状態で車椅子を届けてあげたいと思い、活動への思い入れが強くなりました。

また大学内では密に関われない、様々な国籍や年代の方々と接することができたのも私の大きな財産となっています。３年でプロジェクトを引っ張る立ち位置になり、学生同士だけでなくNPO側の方や外部の方とも連絡を直接取るようになり、自分のビジネスメールのマナーやボキャブラリーの足りなさを痛烈に感じました。そこで練習と言えば恐縮ですが何通もやり取りをし慣れることで、いざ４年生で就職活動中に企業と連絡を取る際、この活動でやってきたことが非常に活かされたと感じます。

今年は３年生に引継ぎ、サポートする側でプロジェクトを見守ってきました。今まで先輩に協力して頂いた分、今度は自分も後輩へ返そうと客観的な視点から微力ながらアドバイスをしてきました。また今年度の日光マウンテンランニングでは自分と２年生２人と１年生１人の４名でボランティアをしてきました。今年は何も販売しない分、ボランティアに集中し十分に貢献できたのではないかと自負しています。２年生の２人も率先してまとめてくれたこともあり、無事に終えることができました。

私は今年度のラオスプロジェクトは残念なことに訪問を見送りましたが、４年間を通しカンボジアとミャンマーの贈呈式に参加できたこと、もんじゃまつり、相生祭でより利益を出すために改善を続けてきたことなど、途中で辞めずにやり通せたことは私の自信となり社会人となっても生き続けると思います。多くの人に出会い、経験をし、学び、この活動で得たものは一生の宝物です。たくさんの人に支えられ、時には心配もかけてしまったと思います。小田さん、森田さんを始めとするNPOの方々、小泉先生、先輩方、同期と後輩のみんな、お世話になりました。この場を借りて感謝いたします。本当にありがとうございました。卒業して終わりではなく、卒業後もできるだけ折り合いをつけ、活動に関わっていきたいです。

今年度の車椅子プロジェクトの活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　４年
横山　奈瑠実

私が今年度最も印象に残っている活動は、鎌倉養護学校の施設訪問ともんじぇ祭りです。昨年に引き続き今年も鎌倉養護学校に施設訪問させて頂きましたが、養護学校のPTAの方が私の顔を覚えていて下さり、「去年も来てくれたよね。」と声をかけてくれたことがとても嬉しかったです。昨年同様車椅子の搬入作業を行いました。普段の車椅子の整備ではあまり見かけないようなタイプの車椅子もあり、勉強になりました。

また、養護学校の職員の方やPTAの方々に私たちの活動についてお話させて頂ける機会があり、その際に私たちが日頃どのような活動を行っているのかということだけでなく、この活動を理解し、尽力して下さる皆様に、この活動に対する思いと感謝の気持ちを伝えることができたこともとても良かったと思います。

もんじぇ祭りについては、私にとっては今年で最後のもんじぇ祭りだったので売り上げを上げたいというのはもちろんですが、みんなで協力して楽しくできたらいいなという思いもありました。今年は例年と違いソーセージも販売したため、品数が多く大変なこともたくさんありましたが、結果として売り上げを多く上げることができたので良かったと思います。もんじぇ祭りをきっかけにプロジェクトのメンバーの仲もさらに深まったと思うので、みんなで協力して楽しくという目標も達成できたと思います。毎年もんじぇ祭りは真夏に行われていたためとても暑くて辛かったですが、もうもんじぇ祭りに参加することもないと思うと、少し寂しい気持ちもあります。来年は今年の反省を生かしより良いもんじぇ祭りになったらいいなと思います。

私は１年生の頃からこのプロジェクトを続けてきましたが、このプロジェクトに参加したお陰で日本だけでなく発展途上国の肢体不自由児のことについても知ることができました。そして、何をする時にも自分一人ではなく、まわりに支えてくれる人がいるおかげで物事は成り立っているということを改めて実感することができました。社会人になってもこの気持ちを忘れず、日々感謝の気持ちを持って過ごしていこうと思います。

3年間の活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　4年
小此木　玲奈

はじめに3年間、「海外に子ども用車椅子を届けよう！プロジェクト」に参加出来たことに感謝の気持ちでいっぱいです。また、会員の皆さんやプロジェクトメンバー等、世代も国も違う多くの方々と関わることができ、様々な経験をさせてくださいました。

私がボランティアに参加したのは、大学2年生の春でした。ボランティアに初めて参加した時は、月に1回の定例会に参加して資金集めのためにお祭りに参加するだけだと思っていました。しかし、ただのボランティアだけではないことを毎年行われるもんじぇ祭りや相生祭をはじめ、人との繋がりと信頼関係を築くために毎年欠かさず日光天然かき氷の徳次郎さんの元でかき氷研修や氷の切り出し等に参加したり、月1回の定例会に参加して小田さんをはじめとする会員の方々やボランティアに参加している方々との関係性も大切にしていくことで車椅子プロジェクトが続けられているのだと学びました。車椅子プロジェクトでは、プロジェクトメンバーと多くのことを経験、学び、挑戦、ができ皆さんと一緒に成長することができました。このプロジェクトに参加していなかったら、きっと、人との縁や常に車椅子プロジェクトが多くのサポーターがいて会を支えてくださっていることの感謝の気持ちを持つことの大切さに気づくことも出来なかったと思います。

みんなと一緒に成長できたのも、一緒に頑張っている仲間と共に頭を抱えたり、泣いたり、怒ったり、壁にぶつかったりしたからだと思います。カンボジアプロジェクトでは、カンボジアでプレゼンをしたいと思い挑戦しましたが、計画性のなさとメンバー内とのコミュニケーション不足で、プレゼン前日まで怒られながら資料作成し本番に向けて必死で仲間と最後までやり抜けるよう頑張っていたのを今でも鮮明に覚えています。カンボジアプロジェクトでの悔しさを糧に、ミャンマープロジェクトでもう一度プレゼンをしたいと小田さんに申し出て計画的に、積極的にメンバーとコミュニケーションを取るように電話やLINEで打ち合わせを毎日のように交わすようにしました。結果、贈呈式に出席した家族や病院の関係者の方々が涙を流しくださり感動と喜びと達成感が大きかったです。

車椅子プロジェクトに参加して、最高の仲間と共に多くのことに挑戦し、やり抜いてきたからこそ今の自分がいると思います。これまでと違った角度でボランティアに参加できたことで、社会人に出て役立つノウハウを身につけることができたと思います。3年間、車椅子プロジェクトに参加できたことを皆様に心から感謝しています。ありがとうございます

報告書

英語文化コミュニケーション学科　４年
奥泉　由花

私は、今年度でこの活動は２年間参加させて頂きました。活動を振り返ると大学２年と３年生の時が主に私たちの学年が主としてやらせてもらいました。したがって、不安な事や大変な事も沢山ありましたが、その分素晴らしい経験と能力を培うことができたと思います。特に、今年度に関しては３年生が主体としてやっていく形だったので、私たち４年生は後輩のサポートに回るというのが役割でありました。

活動をしていくにあたって思ったことが２つあります。１つ目は、サポートする事の難しさです。昨年度に引き続き、もんじぇや文化祭など様々な活動に参加させて頂きました。今までは、自分たちの学年がチームを引っ張って進めていました。しかしながら、今年度は後輩が前に立って進めているのをサポート側として見守るという形で活動をしてきました。チームの現状を把握し、後押しできるようなサポートの仕方をしなければならないと強く実感しました。今年度の前半ではチームの土台作りが難しいことだと思いました。新しく入ってくれた１年生が多かったことはとても嬉しいことでもあります。その一方、チームでモチーベーションを合わせることは困難であることも事実でありました。したがって、１年生とコミュニケーションを図ることを最優先するべきだと思ったので、定例会やもんじぇでは積極的に話をすることに努めました。もんじぇの準備では、番号札係を１、２年生と作業を行いました。主に２年生がリーダーとして指示を出して進めてくれていました。私も一昨年度の情報を共有しながらできたので効率も良く進めることができたので達成感を味わうことができました。私自身は、とても人見知りだったので特に後輩に対して自分から話しかけるという行為をできませんでした。そんな自分が後輩とコミュニケーションとれるように成長させて頂いたのも車椅子の活動があったからです。この活動では、沢山の方々との出会いも多く価値観や世界観がより一層広がったと思います。

２つ目は、チームワーク力の重要さです。今年度はじめの就職活動をしていくなかで、チームワーク力が如何に大切で必要不可欠であるものかを会社説明会に参加する度に思い知りました。それをしみじみと実感した理由としては、私は幼い頃から団体行動が苦手だったからです。しかし、大学生活４年間で克服をしたいと思い、車椅子の活動に関わらせて頂いたのがきっかけでした。それもあり、辛い事もありましたがその努力が実った瞬間を感じることができて嬉しく思いました。チームの一員としてより活動に貢献していかなければならないという責任感が強まり、モチベーションがさらに上げることができ４年生の集大成を迎えられたことが良かったです。

人との接し方や関わり方をこの活動で１から学ぶことができた思いとても感謝しています。この土台を忘れずに社会に出て人間関係を円滑にできるように努めていきたいです。

車椅子今年度報告書

英語文化コミュニケーション学科　4年
江川　こころ

今年度、私は日本チームとして毎月の定例会に必ず参加し、ラオス行きの車イスを主に清掃・梱包作業をしました。今年度はタイに送るのか、ラオスに送るのか１年生から４年生まで全学年が何度も会議を開き、後悔しない決断をするのにとても時間がかかりました。小田さんや小泉先生含めNPO法人の方々にも相談したりと大掛かりな年でしたが、全員が納得する送り先を決断出来たことが何よりも１つのチームとして目標が定まった瞬間だったと思います。その瞬間は私にとってもとても嬉しい瞬間でした。今までの何年もかけてチームワークを大切にしてきたこの活動だからこそ、全員が一つの目標を立てて行動し始めたからです。また、ラオス行きに送る資金として、日本チームはプレもんじぇ・もんじぇ・相生祭などで多くのイベントごとに参加し、ラオスに送るために全員が一丸となって売上を上げることができました。私も積極的に参加して、呼び込みやアピールをしたことで当日は売上が達成できました。そして、下級生の仲間ともコミュニケーションを取り、チームワークが強化できました。何事にも行った際には反省会を設ける事で、次に活かせる行動ができることを今年度学びました。そして、今年は４年生中心ではなく３年生が中心となったラオス行きのプロジェクトだったので、４年は日本チームとして悔いのないように残り最後の車椅子プロジェクトに参加したいと思います。

私にとってこの「海外に子ども用車イスを届けるプロジェクト」に参加し一仲間として2年半活動できて当たり前のことへの大事さを改めて痛感した日々でした。遠い羽村まで毎月のように早朝から出発し遅くまで外で寒い中暑い時期もありながらモチベーションをキープしながらの活動をしたことは何よりも学生生活で誇りある充実した活動でした。積極的でない性格の私からしたら、一人でこの活動に参加しはじめ、仲間の輪に積極的に声をかけ行動し仲間の存在がなければ自分がつらい時に相談や助けてほしいと言えなかったと思います。今年度は就活もあったので車イスの毎月の活動が何よりも息抜きでもありました。行き詰った時に気持ちをハッピーにしてくれる仲間がいたからこのボランティアにも前向きに参加できたと感じています。今年度は大きく誰もが成長できた年だと私は思います。喜怒哀楽のあった活動は一生誇りですし、現地の海外の子どもたちの笑顔を見て車イスボランティアのすごみが増した年でもあり、やりがいのある活動でした。

一年間の報告書

英語文化コミュニケーション学科　４年
金刺　珠里

大学生活最後の一年間の車椅子の活動について、まとめたいと思う。この一年は、就職活動があったため、なかなか月一の定例会に参加することが出来なかった。また、火曜日のお昼のミーティングにも相生祭が終わってからは、参加する機会が減ってしまい申し訳ないと感じていた。この一年間の車椅子の活動を通して、三年生を中心に積極的に動いている様子をとても感じていた。ある時は、三年生だけでは解決できないということで、四年生のみんなに相談する場面があり、この活動はどうなるのか心配になったこともあった。しかし、三年生が様々な困難と向き合いながら成長していく様子や、一人一人がこの活動に対する高い意識を持っていることを感じ、この仲間なら大丈夫だろうと確信した。また、この活動に取り組むみんなが、とても思いやりがあり、素直で優しい人たちであるということが分かった。学部や学年関係なしに、コミュニケーションが取れる環境は、当たり前のようで当たり前ではないことを認識するとともに、自分たちが行っていることに対して
もっと自信を持っても良いのではないかと改めて思った。

私は就職活動を通して、なぜこの車椅子の活動を始めようと思ったのかを考えるきっかけにもなった。普通に学生生活を送るということに、車椅子の活動は必修ではない。しかし、月一の定例会や火曜日のお昼のミーティングに参加して、この活動のために力を尽くしたいと思う、自分自身の考え方や価値観をこの活動を通して認識することが出来た。私は、幼いころから海外の方と日本の橋渡しの役割をすることが夢であったため、この活動は自分の将来の夢へと近づく第一歩にもなったと思う。私は、この活動を通して培われた自分の価値観や考え方を最大限に活かせる、海外と日本との橋渡しの役割が出来る企業に就職が決まった。四月からは、国内外の方々の異なる価値観を最大限に社会で活かしていける、また、国内外の社会問題を人と Tech によって解決していき、そこから利益に繋がるように働きたいと思う。

この活動は、何のためになるのか分からないと思う後輩が多いいだろうが、この活動に参加している時点で、人とは違う行動を起こしている点を認識し、この活動に参加していたら何か得られるだろうではなく、この活動を通して何かを得たいから活動をするというように、目的意識を持って取り組んだ方が、もっと得られるものは大きいと思った。最後に、この活動がこれからも続いていくことを心から願いたいと思う。

一年間を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　４年
若山　弥紀

今年度の訪問先はラオスへ決定しました。昨年と比べて訪問先の決定が遅れていましたが、プロジェクトメンバーの「ラオスへ訪問したい」「現地で贈呈式の参加をしたい」という想いが通り、ラオスへの訪問が決定しました。メンバーの人数が多いため全員が集まることが難しいなか、三年生が企画し、全員が集まる時間を放課後に設けてくださり、その会議で、一人一人がどの国へ訪問したいのか、どのようにプロジェクトを進めていきたいのか、という意見を聞くことができました。普段、メンバー全員が同じ活動をしていても、学年を超えて密に話すことがあまりないと、一人一人がどのような気持ちで活動をしているのかが明確にはならないので、時間を設けて、それぞれの意見に耳を傾けることは重要でした。今後も、チームで動くためには全員参加の話し合いの場が設けられることが大切であります。また、毎週行われているミーティングでも、三年生だけが話をするだけではなく、それに対して積極的な質問や意見がでると、より有意義な時間を皆が利用できます。車椅子プロジェクトは、ボランティアを経験できるだけではなく、学生のうちから「報告・連絡・相談」を習慣づける良い機会であるので、そのことをメンバー全員が心掛ける必要性があると再認識する一年でありました。

今年度のもんじぇ祭り、相生祭では、ラテン大和さんには大変お世話になりました。お陰様で、売り上げ目標を上げても完売することができ、活動資金へ繋げることができました。達成の喜びとともに、周りの方々への感謝の心を持つ大切さを改めて感じる時間となりました。他には、私は参加することはできませんでしたが、鎌倉特別支援学校、町田の丘学園施設の訪問等の、日本でできる学びの機会もありました。定例会だけではなく、車椅子に触れる時間を増やすことで、更なる学び、知識がつくので、今後も続ける必要性があると感じます。車椅子プロジェクトの活動の目的は、海外の子供たちに車椅子を送ることでありますが、国内の事情も知ることでより視野が広がると思います。

定例会で、車椅子ボランティアに携わらせていただけたことに感謝しています。会の皆さま、ボランティアに参加しているベトナム人の方々、社会人の方々、学生の方々との交流が楽しく、ボランティア活動を通して人と繋がることの大切さを改めて感じました。楽しく活動をして、その想いが車椅子に伝わり、海を渡り、そして多くの子供たちの笑顔に繋がることを今後も祈っています。

海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトに参加して

英語文化コミュニケーション学科　2年
河野　日和

昨年度からこのプロジェクトに参加して今年で2年目となる活動でした。昨年に引き続き、今年度も様々な活動に参加することができました。
2年生に進級したばかりだった頃の私は、昨年度までのただ先輩方に着いて行くだけの後輩気分が抜けきっていませんでした。しかし、4月から新入生が加入したことにより、定例会の清掃や梱包のやり方、もんじぇ祭りや相生祭の仕事の進め方などを教える機会が増え、このままではいけないと感じるようになりました。もんじぇ祭りの前に行われたプレもんじぇでリーダーをやらせていただいた際、ただ周りに着いて行くのではなく、「ここをこうしたらもっとよくなるのではないか」など自分の考えをしっかり持って周りに伝え、実行していくことの大切さを強く感じました。 また、昨年度と同様に行われた勉強会では、子ども用車椅子が発展途上国ではまったく足りていないという現状などを改めて学びし 、「私たちはこういう子どもたちのためにこの活動をしているのだ」ということを改めて感じました。

今年は3年生に進級し、私たちの代がプロジェクトの中心となって動いていきます。先輩方が築いてきたプロジェクトの活動をさらにより良いものにしていけるようにしたいです。また、今年度は所属しているゼミナールの活動があったため海外訪問に参加できませんでしたが、来年度は海外の子どもたちのもとに訪問したいです。

海外に子ども用車椅子を届けよう！プロジェクト報告書

英語文化コミュニケーション学科　２年
石井　水稀

私は今年の活動を経て、自分を見つめなおすことができたと思います。昨年のまだ私が１年生だった頃の気持ちは、わくわくやたのしいというもののみでした。ですが、今年２年生になって、どうしたら成功するのか。そのためには何をしたらいいのか。考えに考え抜いた先に、私が今まで感じていたたのしい気持ちがあったのだなと１学年上がり、先輩方とより近くで接することで分かりました。成功するためにはチーム全体で何をするべきなのか、自分自身個人では何をするべきなのか。誰かが考えるのではなく、みんなが考えることが大切で、ついつい目先の目標やチーム全体のことに目が行きがちになってしまう自分がいたなと振り返ってみて感じています。自分がこの組織の中でどのように動いたら、どのような影響が出るのか考えながら行動することが大切だと感じました。チーム活動とは何かという面で、最近になって改めて考えさせられました。チームとして活動するにあたり大切なことは、目指す目標が明確にあるのかということそしてその目標が全体に浸透しているということであり、それが成功につながると感じています。それからコミュニケーションの大切さを感じました。どんなこともひとりでは成し遂げることができないです。周りとうまく協力することが大切でそのためには、報告連絡相談をすること、細かいコミュニケーションを多くとらなくてはならないと感じました。今年はそれが少なかったと感じています。来年は意識して取り組みます。

また、今年はもんじぇ祭り、相生祭にてブラジルのソーセージを販売し、その際にラテン大和さんにお世話になりました。今までと変わりもんじぇ祭りでは販売品目が増えたり、相生祭では揚げバナナからブラジルのソーセージに変わったということもあり、不安も多くありましたが、ラテン大和さんの貝原さんをはじめ、ラテン大和のみなさんの温かさにとても助けられました。新たに今年の活動で得られた繋がりをこれからも大切にしていきたいと思います。この活動をしていなければ、先輩やNPOの方々を含め、たくさんの大人の方々と関わりを持つことができてとてもうれしいなと感じました。

今こうして考えてみると、大学生活も残り半分になってしまったんだなと焦りを感じます。残りの二年間で何が自分にできるのか、自分は何をしたいのか。もっともっと考えたいと思います。この活動に対しても後悔することなく多くのことに取り組んでいきたいです。私たちがこの活動をできているのには多くの方の支えがあってのことだということ、それから海外の子どもたちに車椅子を送ることで一人でも多くの子どもたちの人生がより豊かに、笑顔が増えてほしいなって気持ちを常に考えて活動していきたいです。

今年度の活動をふりかえって

英語文化コミュニケーション学科　2年
高村 春那

今年度は海外に子供用車椅子を届けようプロジェクトに参加して2年目の年でした。1年生の時の言われるまま動いていた状況とは変わって私は2年生になり、メンバーにも新しい1年生が加わりました。ついて行くだけではなく支持する立場になり、イベントの裏方にも関わらせていただきました。春に新入生勧誘のプレゼンテーションを行ったときは上手くこのプロジェクトについて説明出来るのか心配で仕方なく、後輩が出来なかったらどうしようという不安でいっぱいでしたが、予想をはるかに超える数の1年生が次のミーティングに見学に来て下さってとても嬉しかったことを覚えています。

今年度、1番私が大きく関わったのは相生祭でした。リーダーである先輩に次いで2番目に責任のある副リーダーを担当しました。私はこの大学生活において大きく責任のある立場に立ったことがなく、本当に最初は不安でした。一番最初の会議は5月に開かれ、11月のイベントにこんなに早くから動き始めるのかと驚きました。何度も会議に参加したり書類を作成したりすることがとても緊張することであるということに、この立場になってから気が付きました。どうしたらいいんだろうと不安になる度に先輩方がサポートしてくださったり、アドバイスをくださったりしたおかげで一つ一つ確実にこなしていくことが出来ました。相生祭が近づいていくにつれて不安も募っていきましたが、多くの人に支えられてイベントが成り立っているのだと実感できたのは自分がこの立場に立ったからだと思います。当日にはいくつかハプニングも起きました。悪天候により客足が伸び悩んでしまったり、鍋の大きさが足りずソーセージに火を通すことに予想より時間がかかってしまいました。ですが途中で追加の鍋を買いに行ってくださった先輩や大きな鍋を貸してくださったラテン大和さんのおかげで乗り越えることができました。結果、去年の売り上げを大幅に超えることができました。私は責任者である関係で調理場を離れられず、実際にお客様がソーセージを買っていく様子を見ることは出来ませんでしたが、どんどん減っていくソーセージや売り子担当のメンバーからの報告で嬉しくなったのを覚えています。2日目には予定していたよりかなり多くのソーセージを追加しましたが無事完売させることが出来ました。終始忙しく休む暇もなかった為、売り切った後は全員がヘトヘトになりましたがそれを上回る大きな達成感を感じました。何ヶ月もこの2日間のために準備してきたことが予想の何倍も上手くいって本当に安心したのを覚えています。副リーダーになった時は自分で大丈夫なのだろうかという不安だけでいっぱいでしたがやって良かったと心の底から思いました。私の立場でも大変でしたが、リーダーである先輩は私の何倍も大変だったと思います。準備に追われて、多くの書類を書いて、色んな方と連絡をとって、副リーダーの私も知らないところで先回りして仕事をこなしてくださり、本当に何度も助けていただきました。拙い仕事ぶりや気が付かないことが多く、迷惑をおかけすることもありましたが先輩がいて下さって本当に心強かったです。ありがとうございました。プロジェクトのメンバーや関わ

ってくださった企業の方、大学関係者の方、先生方にも感謝の気持ちでいっぱいです。誰か一人でも欠けていたら、この相生祭の大成功はなかったと思っています。ありがとうございました。

来年度は私たちがリーダーになってさらに引っ張っていく立場になります。今まで知らなかった苦労や不安を感じることも多くなっていくと思いますが、その度にこの経験を思い出しながら周りと協力して乗り越えていきたいと思います。イベントだけでなく、月一回の定例会も大切にしてなんのために自分がこのプロジェクトに参加しているのかを忘れずに活動していきたいです。今年度はご迷惑をおかけすることも何度もありましたが、来年度はより一層このプロジェクトに尽力していきたいと考えています。１年間ありがとうございました。

今年度の活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　2年
鎌田　舞

今年度の活動は自分にとって変化のある年でした。まず、自分が教える立場になったことです。今年、このプロジェクトに1年生が加わったことで、これからは自分が後輩に教える立場となりました。今までは、先輩方に教えてもらっていたのが、次は、自分が先輩として教える立場となりました。後輩にこのプロジェクトをはじめ、定例会、もんじゃや相生祭などをしっかりと伝えなければならない責任さを感じたと同時に、今までの先輩の大変さやこのプロジェクトに対する熱意をより痛感しました。次に、昨年度よりも定例会にあまり参加できなかったことです。資格の勉強、ゼミ活動やインターンシップなどが徐々に本格的に始まったことであまり参加できませんでした。毎月の定例会で、後輩に定例会での業務を伝えないといけないのにきちんと教えられていないのが反省点であります。3年生になると以前に比べてゼミ活動が本格的になり、プロジェクトとゼミ活動の両立に不安を感じますが、忙しい時でも、自分ができそうなことを率先して見つけて行い、自分ができる範囲で教えられるように頑張って活動していきたいと思います。さらに、前回と前々回に引き続き、まだ現地の病院や贈呈式に参加できていません。このプロジェクトは、国内でも自分が手助けとなることはありますが、やはり、実際に現地へ訪問することでその国での現状や見えてくるものなどを理解できると考えています。現地へ訪問することで、このプロジェクトの本質や目的を本当に理解できると考えています。そのためにも、今回は現地へ訪問できるようにしたいです。最後に、次年度から、自分が副代表としてこのプロジェクトを担う立場になったことです。春から、副代表としてこのプロジェクトを担う立場となるので、以前に増してより不安や責任感を痛感してきています。代表となる河野さんをサポートできるか、新3年生のみんなと今後も先輩たちように活動していけるのか、プロジェクトメンバーへ迷惑をかけないかなど心配もあります。この2年間を振り返ってみて、今日に至るまでこのプロジェクト活動を続けられたり、充実しかつ、やりがいを持って活動できたりするのは、やはり先輩に支えられていたからだと改めてより実感しました。これまでの反省を改善し、このプロジェクトを大学内だけでなく、もっと多くの人に知ってもらえるように次年度の活動も頑張っていきます。

今年度の活動を振り返って

英語文化コミュニケーション学科　１年
川上 まどか

今年度は定例会や施設訪問、もんじぇ祭り、相生祭など多くの活動に参加しました。定例会では、色々な国・年代の方々と共に車いすの整備・梱包作業を行いました。整備では、タイヤのパンク修理やキャスター交換などやったことのない作業ばかりで大変難しいと感じましたが、私たちのこの作業で救われる人がいるのだという気持ちを持って取り組んでいました。梱包作業は、車いすを緩衝材で包んでガムテープで固定、そして重さを測って記入するというのが一連の流れですが、これは国から国への輸出に関わる重要な作業であるという話を聞き、抜け目がないように確実に梱包しました。そんな適度な緊張感を持って毎回参加していましたが、その中では色々な方とお話をして海外や人生観についてのお話しをして頂いたり、昼食にカレーを振る舞って頂くなど、楽しみながら活動することができました。

夏休み中には、ボランティアメンバー数名で町田の丘学園へ施設訪問をしました。そこでは、実際に授業に参加させて頂いたり、食事の様子を見学させて頂きました。さらに、肢体不自由のために車いすを使用している生徒さんのリハビリの見学もさせて頂きました。スパイダーと呼ばれるリハビリ装置を使用して歩行練習する生徒さんの嬉しそうな表情が実に印象的でした。この施設訪問で、「肢体不自由」への知識・関心を深めると共に、一部ではあるけれど車いすを利用している人の生活に触れるという貴重な経験をすることができました。

もんじぇ祭りでは、当日の販売のみならず事前準備として発注作業やそれに伴う業者との連絡などをやりました。初めてのことばかりで手際よく処理する事ができませんでしたが貴重な経験となりました。また、ただ商品を売るのではなく、１人でも多くの方にブラジルやこの活動について知ってもらうための工夫が必要となり、思うように進まないこともありましたが話し合いや試行錯誤の末に成功させることができました。

私は今年度の活動を通して、人との関わり・報告・連絡・相談・協力の重要さを強く感じました。今年度の活動から得たことを次年度以降の活動に活かして、より良いものとしていきたいです。

今年度の活動を振り返って

子ども教育学科　１年
佐野　莉桜

私は今年度この相模女子大学に入学し、海外に子ども用車椅子を届けようプロジェクトに参加させていただきました。入学した時から、このプロジェクトに参加してみたいと考えており、4月に行われた説明会での先輩方のお話でさらに興味が湧き、入りました。この１年間は、毎月の定例会、プレもんじぇ、鎌倉の養護学校への施設訪問、日光マウンテンランニングのお手伝いなど、様々な活動を経験しました。毎月の定例会では、羽村へ行き、子ども用車椅子を整備、清掃、梱包と実際に海外に届けることが出来るようにします。私はこの時初めて子ども用の車椅子というものを目にし、多くの種類があるということを知りました。また、車椅子に乗る子が好きなキャラクターのプリントがされてあったり、可愛いシールが貼ってあったり、色とりどりのシートが使用されていたりと、どれも一つ一つ違うもので、家族の愛が多く詰まったものなのだと感じることが出来ました。プレもんじぇでは、相模大野のコリドー街でビッグホットドッグとブラジルのフランクソーセージと、生ビールを販売しました。地域の方が多く参加するお祭りで、プロジェクトの活動のことや、ブラジルのことをたくさんの方に知ってもらうのは大変でしたが、楽しく貴重な経験でした。鎌倉の養護学校への施設訪問は、毎月の定例会で整備などをしている車椅子をいただきました。夏休み中ということで、生徒の皆さんとはお会いできませんでしたが、先生方にこの活動のことを知っていただき、お話を伺うことが出来て良かったです。日光マウンテンランニングのお手伝いでは、初めての宿泊で、先輩の方々と参加させていただきました。初めて日光に行き、とても自然が素晴らしく、素敵なところだと感じました。どれも初めてで、とても貴重な経験ばかりでした。この活動で、多くの達成感を感じたと同時に、このプロジェクトはたくさんの方々の支えやご協力があって成り立っているのだということを実感しました。また、どの活動でも先輩方の動きや、リーダーシップにとても助けられました。分からないことや出来ないことをサポートしていただいたことにはとても感謝しています。4月から2年生になり１年生が入ってくる今、多くのことを吸収し、見習っていきたいと思いました。

また、このプロジェクトの大きな活動の１つとして、実際に海外に行き車椅子を届けることをしています。今年は、私は海外に行くことは出来ませんでしたが、この4年間の活動の間で１度でも実際に海外の様子を見ることが出来ればと思っています。

子ども用車椅子を海外に届けようプロジェクト 報告書

英語コミュニケーション学科　１年
富永 結

子ども用車椅子を海外に海外に届けようプロジェクトでは、主に月 1 回第 3 日曜日に定例会を行っています。定例会では、車椅子を修理したり綺麗に掃除したり海外に送るために梱包をしたりしています。定例会に参加して良かったと感じることは 2 つあります。

1 つ目は外国の方々との交流があることです。定例会にはタイの方々や日本に滞在しておられる海外の方が参加されています。活動を行う上で話したり一緒に作業をしたりする機会がたくさんあります。昼食を食べる時間では、大学生ですか？何を勉強していますか？などと積極的に日本語で話しかけてくれます。なので自分から話すことが苦手な私でも楽しくお話しする事ができました。

2 つ目は実際に車椅子を使っている方と触れ合える事です。全然車椅子を使っている方とお話した事がなかったのでこの活動を通してお話しすることができとても新鮮でした。ただ単に活動をするだけではなく車椅子を使う方の気持ちや車椅子の大切さを知る良い機会になりました。

定例会以外にもプロジェクトを運営するための資金作りのために相生祭やもんじぇ祭りなどで今年日光天然かき氷やブラジルのソーセージを販売しました。私は相生祭に参加し物を売る事の大変さを知ることができたし先輩たちの運営を間近で見ることができ、とっさに動ける対応力の重要性を知る事ができました。私は店で物を売る体験をしたことがなくイメージができなかったのですが先輩たちの動きを見て自分から動いて発信する難しさやハプニングがあった時の対応力の大切さを知ることができました。もんじぇ祭りで販売している日光かき氷に関して、私は実際に氷の切り出しにも参加させていただきました。そもそも日光かき氷自体あまり知りませんでした。しかし、かき氷を運営されているとくじろうさんという方や地元の方々とお話をしてみるとかき氷はこんなにも多くの方々の支え合いから成り立っているのかと感心しました。そして、氷が滑り台のようなものを使って小屋に送り保存されているのを拝見して伝統の尊さや体験の貴重さを知ることができました。

これらの体験を通して改めて定例会で行っている作業がいかに大切で相生祭やかき氷の切り出しという貴重な体験をする事で少しでも人の役にたっているのだと感じることができました。今年度はラオスで車椅子授与式が行われます。しかし、私は行く事ができません。大学生のうちに実際に外国に行き車椅子をどういった形で使われているのか必要としている人がいるのか自分の目で見てみたいなと考えています。この活動にはとくじろうさんを始めたくさんの方々のおかげで成り立っています。その方々に感謝し自分にできることを少しでもできるようにしていきたいと考えます。

今年度の活動の報告書

英語文化コミュニケーション学科　１年
土屋　美月

毎月行われる定例会では、車椅子の掃除や梱包を行いました。
初めて定例会に参加させていただいたときは月に一回倉庫の場所を借り、私たち学生だけでなく大人の方や外国人の方がボランティアで活動をされていて私もその方たちの真似をしながら定例会に参加する日々が続きました。 何回か回数を重ねるごとに、ベトナムの方や他の方とお話をしたり、梱包だけでなく修理もさせていただいたりしました。 毎月一度しか行われない定例会ですが、今年度も精一杯引き続き参加していきたいと思います。 また、１月に行った日光での氷の切り出しに参加させていただいたのも１つ私は印象に残っています。 もんじぇ祭りで使用するかき氷の作り方を間近で見たり、全ての作業の体験をさせていただきました。 実際私たちも全ての作業を体験させていただいて、最新の機器など使用せず、手作業で行っており、ものを作る大変さを感じました。 炊き出しでは日光の打ちたてのそばやカレーをいただき、人の温かみを感じられました。
今回、海外の方もボランティアに参加されておりいろいろな方とお話をすることができました。 また、昔ながらの手法で行われており、今もなお伝統を守り続けていることの凄さを感じました。　メディアでも有名な日光のかき氷に使用されている氷の切り出しに参加でき、貴重な体験をさせていただきました。 私は昨年度、もんじぇ祭りと相生祭のプロジェクトに関わることができなかったので今年度なにかしらの形で関わりたいと考えています。

✿2018年度卒業生の皆さん
ご卒業おめでとうございます✿